

Hanno Beck 「Alexander von Humboldt 研究史」 および「Alexander von Humboldt の談話」

佐々木 博・田村 百代

はじめに

A. v. フンボルトは1769年に生まれた。彼の生誕200年を記念して、1969年ボンに A. v. フンボルト財団は『A. v. フンボルト 業績と世界的価値(Alexander v. Humboldt Werk und Weltgeltung)』なる記念出版物を刊行した。財団会長であり、ノーベル物理学賞受賞者である故 W. ハイゼンベルク、現代のフンボルトとまでいわれた故 C. トロールら 10 名の著者が寄稿している。その序言に財団事務総長 Heinrich Pfeiffer は次のように述べている。「世界旅行家と研究者、科学の組織者と保護者であるアレキサンダー・フォン・フンボルトは、自然科学と精神科学に同じ程度に影響を与えた。彼の名前と業績は今日西ドイツでよりも外国でより有名となっており、西ドイツではアレキサンダーは多くの場合兄ヴィルヘルムとその教育理念の影にかくれがちである。アレキサンダー・フォン・フンボルトがかくも多くの科学分野に与えた、また今日もなお影響力をもっている、彼の影響と豊かな刺激とは、新たに記憶さるべきものである。」と結び、出版に当たり当代随一のフンボルト研究家であるボン大学教授 Hanno Beck に謝辞を述べている。1973年、ボン大学での1年間の研究後帰国に当たり、ベック教授に翻訳の意を伝え、帰国後補足のお手紙をいただきながら、無力と怠慢から13年が経過してしまった。

H. ベックは生誕 200 年記念出版の中に 2 篇「アレキサンダー・フォン・フンボルトの談話に寄せて (Hinweise auf Gespräche Alexander von Humboldts)」, 「アレキサンダー・フォン・フンボルト研究史(Zur Geschichte der Alexander-von-Humboldt-Forschung)」を寄稿している。他の 8 篇は、「現代における世界的科学教育について」, 「A. v. フンボルトと哲学」, 「A. v. フンボルトにおける文学と自然科学の統合」, 「ラテンアメリカの芸術家風描写にとつての A. v. フンボルトの意味」, 「“コスモス” と “景観” ——A. v. フンボルトおよび 20 世紀のフンボルトの地理的解釈におけるコスモロジー風かつ景観相貌的思考の動機」, 「生物学者としての A. v. フンボルト」, 「植物の生活形態——今日の生態学的観点でみた A. v. フンボルトのイデー」, 「全世界におけるフンボルト兄弟の名前」, 「A. v. フンボルトとアメリカ合衆国」。

H. ベックの「A. v. フンボルト研究史」をみればわかるように、フンボルトに関する研究はすでに彼の存命中からかなり多数あり、没後彼が書簡の公表を遺言によって禁じたために中断したが、以後堰を切った洪水のごとく、ほとんど無数といつていいくらい、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ、ラテンアメリカ諸国で発表されている。

日本では野間三郎が戦前に研究に着手したものの、戦後は岩田慶治の研究など散発的であった。19

59年に「フンボルト・リッター 100 年祭」が東京地学協会、日本地理学会共催で記念式典・講演会が上野博物館講堂で開かれた。国会図書館から A. フンボルト、C. リッターの古めかしい著者を借り出して、上野博物館に展示する山本正三さんを記者の一人佐々木は大学院 2 年生時に手伝った。講義で聞いたことしかなかった大著の数々を眼前にして、胸を躍らせ、「いつかこんなものを読めるようになるだろうか」と考えたものだった。この機会に日本地理学会から「HUMBOLDT RITTER 100」なる 29 頁の小冊子が出され、地理 4 巻 3 号（1959 年 3 月）で A. v. フンボルト特集を企画し、野間三郎、西川治、岩田慶治、八杉竜一、前島郁雄らがフンボルトの紹介に努めた。その後 70 年代に大森道子、岩田慶治らのフンボルト研究や紹介があるが、地理学者の目に止めることは少ないまま、現代の日本地理学界ではフンボルトの名は忘れ去られようとしている。むしろ科学史・生態学・文化人類学・国際関係論などの新しい分野でフンボルトは注目され、研究の対象となっているようである。日本地理学会には「脱伝統地理学が進歩」である、との風潮が伝統として定着しつつあるようにみえ、環境論・景観論・集落形態論などは、他分野での評価によって地理学会に逆輸入されているものがでてきた。比較文学の例で分るように、学問・文化とは多分にそのような性質をもっているものであろうが、一つの事柄をかなり深めてから新しいテーマに移った方が成果が大きいようである。

ここに訳出する H. ベックのフンボルト研究は、通り一ぺんのフンボルトの人生航路と業績の紹介ではなくて、苦労して集めたフンボルトと関係あった人々の書簡などであり、彼の人となりや、彼の思想が形成された環境が理解できて非常に有効である。ベックは「フンボルト研究史」の最後に「ただ単に専門科学の面だけを見て、フンボルトの人生と業績と結びついている特別な人間性、彼の援助と芸術保護を見ない人は、盲目である」、と結んでいる。当時のプロイセンの貴族がそうであったように、家庭教師によって教育され、しばしば個人的に教師や学者に家庭に来てもらって話しを聞く（Privatkolleg）ことがしばしばあった。H. ベックの近著で『大旅行家』の姉妹篇である『大地理学者』の中で、「アレキサンダーは兄ヴィルヘルムと共にクリスチアン・ヴィルヘルム・ドーム家での個人講義を聞いたとき、当時優れたビューッシングの政治地理学を初めて瞥見した。ドームは 1777—79 年にバロック時代最大の旅行家エンゲルベルト・ケンプファーの日本に関する著作を出版していたので、興味津津たる島国の名がアレキサンダーをして初めて地理的な諸々の関係に興味を抱かせることになった。この刺激が後に熱帯への秘めた牽引力を強化していった」と書かれており、日本—南米—フンボルトの不思議な結び付きに驚かされる。彼の母方の血がフランス・スコットランド系であることもコスモスの著者にふさわしく 60 歳にして馬車に揺られながら全行程 1 万 8,000 キロのロシア、中央アジアの旅をした強じんな精神力は、まさに「科学の帝王」、「最後の万能科学者」と呼ばれるにふさわしいものである。

1802 年、南米旅行からの帰途アメリカ合衆国にほんのちょっと立ち寄り、ジェファーソン大統領に歓迎されて親交を結んだが、以後当時文化的後進国アメリカの要人のポツダムへのフンボルト詣では続く。後のハーヴァード大学創立者、アメリカ学士院会長、アメリカ地理・統計学会会長、芸術家、作家、パナマ鉄道創設者、ジャーナリスト、大公使、前大統領フィルモア、銀行家……、枚挙にいとまがない。アメリカの VIP がヨーロッパへ来る際にフンボルトに会見して帰ることこそ最大の名誉

であり、目的でもあった。世界の知性と科学の中心であり、その偉大さは今日の世界で比肩できる人物を見出すのが困難である。その彼がアメリカの黒人奴隷制に強い反感を抱いている手紙を出したり、ロシアの上層・下層の二重の階層差の大きさにいらだちを覚えるなど、当時としてはラディカル思想の持主であった。客観的に物を見ようとする者には、社会の矛盾もまた自然現象と同様に、よく見えたのであろう。南米独立の父シモン・ボリバルにイタリアで会って以来熱い声援を送ってきた。

言語学者であり、旧ベルリン大学創立者である兄ヴルヘルムについては亀山健吉による『フンボルト（中公新書）』が出されている。兄以上に大きな科学上の業績を残しながら、未だ日本では大地理学者・自然地理学の確立者とししか扱われていないアレキサンダーの研究は深められる必要があろう。

筑波大学では文部省特別助成金で、フンボルトの著作「新大陸の熱帯地域への旅行 (Voyage aux régions équinoxiales du nouveau continent, 1805—1834)」29巻、および Helen Maria Williams による英訳「個人談話 (Personal Narrative of Travels to the equinocial regions of the new continent during the years, 1799—1804)」5巻の浩瀚を、1984年度に340.8万円で購入した。通称「南米旅行」と呼ばれる30巻の大著はパリで出版されたが、第4巻は計画はされたものの、出版されることはなかった。1970年よりこの大著はアムステルダムの Theatrum Obis Terrarum 社よりファクシミリで再版されて、筑波大学中央図書館に納入されたことは喜しいことである。

ベックの原文やフンボルトの書簡中に多くの人名がでてくるので、理解し易いように（訳注）として、訳者の注を付した。訳注は次の三点を参考にした。

Hanno Beck (1961): Alexander von Humboldt, Band II. F. Steiner, Wiesbaden.

Ch. シンガー著、伊東俊太郎・木村陽二郎・平田寛訳 (1968): 『科学思想のあゆみ』岩波書店。

手塚富雄 (1963): 『ドイツ文学案内』岩波文庫別冊。

アレキサンダー・フォン・フンボルト研究の歴史（訳）

アレキサンダー・フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt) について考えることは、アレキサンダー・フォン・フンボルト自身とほぼ同じくらい古くから行われてきた。兄ヴィルヘルム (Wilhelm) とその妻カロリーネ (Caroline)、実家の姓はフォン・ダッヘレーデン (von Dacheröden)、のように心理的に天分豊かな観察者や、シラー (Schiller)、ゲーテ (Goethe) のように人情に通じた人たち、またハルデンベルク (Hardenberg) (訳注: 1750~1822, プロイセン宰相)、シュタイン (Stein) (訳注: 1757~1831, 政治家)、メッテルニッヒ (Metternich) (訳注: 1773~1859, オーストリア宰相)、ゲンツ (Gentz) (訳注: 1764~1832, フンボルト兄弟の幼なじみで政治家) のように高い地位にいる政治家たちが、アレキサンダーの本質を究めようと何回も試みてきた。彼らが明らかにした記述では、われわれにしばしば水晶のように透明な概観を与えてくれる。この透明さによって、われわれ一人の人間の謎が始まるどんな境界までも、きわめて深く洞察することができるのである。これらの深い考察の例はかなりたくさん残されている¹⁾。これらの人たちがもっていた見解は、今日までも刺激となり、また課題となっている。彼らの見解は、一人の天才に関するその時々を考察を、フンボルトの生涯と業績についてのより計画的な研究へと発展させていくことに貢献してきた。

フンボルト研究について概観してみると、フンボルトについての従来の理解と認識がはっきりしてくる。われわれは、ガイドラインによりかからざるをえないフンボルト研究の報告から³⁾、重要なことを汲み取ることができる。重要なこととは、同時代の人びととのつながり、歴史的瞬間の利、個別化と統合、地理的伝統の連続性、自由と抑圧、個々の研究者のイデオロギー上の強調^{アクセント}と傾倒の程度などである。

アレキサンダー・フォン・フンボルトが生きていた時代に、すでに彼の人格や業績についての考察がなされていたが、彼の世界的名声は確立し、ますます大きくなり、2回の世界大戦と技術のもつ魅力が増したにもかかわらず、彼の名声は維持されてきた。系統的に歴史的把握を試みることはもちろん行われなかったし、彼の生存中もその機会はなかった。初期の伝記は、彼の旅行について詳しく描写した一冊の本にまとめられ³⁾、何の問題もなく出版された。1859年5月6日のフンボルトの死をもって初めて、多くの人たちをよりはっきりした信奉へと駆り立てた。そのうえこうした追憶の言葉のいくつかは、その言葉がなおフンボルトとの生の交際に際して述べられたものであり⁴⁾、歴史的、修辭学的な証言としての価値を保ってきた。

フンボルトは、1841年5月10日付けの遺言状の中で、伝記を書くことをすべて禁止したため、親類や友人は彼の死後しばらくは「個人間の書簡の出版」をひかえていた⁵⁾。多くの生存中の人物が、さらし物にされたり嘲笑されたりすることが予想されるのは確であった。このタブーは、早くもファルンハーゲン・フォン・エンゼ (Varnhagen von Ense) (訳注：1785～1858、フンボルトの友人で作家) の姪であるルドミラ・アッシング (Ludmilla Assing) によって破られた⁶⁾。彼女の書物は当時も注目されたが、当時の宮廷社会における影響を考えるならば、現在なお一層注目に値する。最近まで往復書簡集⁷⁾ のみが相次いで出版されてきた——われわれは今なお完全を期待することはできないし、またそれに到達することもできないであろう。あまりに多くの書簡が紛失されてしまったし、また個人的な理由からますます表に出されなくなってしまったからである。

1869年フンボルトの生誕100年に触れた時、その陳述において、しばしばより明瞭にして、より批判的であったが、もはやすでに典拠の新鮮さは尽きてしまっていたことを、人々は予想していた。再度いくつかの回想録⁸⁾ が、他の無批判で、無方針な寄稿を圧していた。1864年(訳注：ドイツーデンマーク戦争)と1866年(訳注：プロイセンーオーストリー戦争)の戦争は、生誕100年が来るのを一時的に忘れさせてしまったが、その後、1869年の記念すべき年以前に、科学的な原理に則った最初のフンボルトの伝記についての計画が明らかにされた。1868年9月18日カール・ブルーンス (Karl Bruhns) (訳注：ライプチヒ大学天文学教授) はドレスデンにおける自然科学者会議の講演において、フンボルトの生誕100年が来ることを取りあげ、「徹底的な伝記が不足していること」を主張した。「彼と個人的な交際があり、彼の本質について今なおきわめて生々しい思い出をもつ人々の数がどんどん少なくなっているのを、徹底的な伝記がないことがなおさら遺憾なことである」。ライプチヒのF. A. ブロックハウス出版社は、ブルーンスがそれを書くならば、フンボルトについての著書を出版することを申し出た。ブルーンス自身は次のように述べている。「この申し出によって私は、フンボルトの活動のあらゆる側面を掲載した伝記をまとめるために、何人かの学者を集めるという考えと決

意が心の中に熟してきた。当時は、科学に大きな功績のあった人のために、故郷の町にブロンズ製の記念碑を建てることを未だ思いつかないただに、一層私にとって彼の生誕100年は、こうした学術上の記念事業を開始する適切な時点であるように思えた。友だち、フンボルト家の人々、個人的に持っている人々が、非常に多くの書簡を用だててくれたので、実際には一部分のみが利用されたに過ぎなかった。カール・ブルーンスは新たに手を伸ばして、彼の下に集まった書簡を一冊の大きな書簡集の形で親しめるようにしようとしたが、この計画は残念ながら失敗した。失敗していなかったら、彼はその間になんかの書簡の紛失をわれわれのために防いでくれたであろう。書簡が紛失したため、可能な限り尽くしたどんな書簡集でも、一断片としか認めてもらえない。

ブルーンスによって編集され、手を加えられた書物は、1870/71年の戦争（訳注：普仏戦争）のためいく分遅れて、1872年に出版された。1869年の生誕100年には遅れた寄稿として出たわけであるが、1869年はまことに具合の悪い年であった。フンボルトは強力な支柱のように、ドイツ・フランス間の橋を確保するように努力してきた。普仏戦争はこの関係をまっ先に破壊し、たしかに巨大なドイツ帝国を形成させたが、ひどく表面的な帝国であり、それによってこの書物もまた損じられた。カール・ブルーンスは職人から努力して天文学者に出世し、フンボルトをなお個人的に知っていたが、この書物の編集者になった。この書物は今までの伝記の伝統には決して基づくものとはなりえなかった。フンボルトは多面的であった——これは疑問の余地がない——。それゆえに書物が細分化され、「共著による伝記⁹⁾」となっても仕方がないように思われた。ブルーンスはこの書物の筆者ではなく、その編集者であった。このことは最近まで、しばしば見落とされてきた。彼は、主要な筆者であるユリウス・レーヴェンベルク (Julius Löwenberg) (訳注：1800～1893, フンボルト研究家)、ロベルト・アヴェーラルマン (Robert Avé-Lallemant) (訳注：1812～1884, 医師で研究旅行家)、アルフレッド・ドーフェ (Alfred Dove) (訳注：1844～1916, プレスラウ大学史学教授) のように非常に多様な人々に本当に自由に思いどおりにさせた。この書物は決してまとまったものではない。それにもかかわらずしばしばこの「功績の多い敬虔な書物」は、フンボルトの多様な活動のために、ただ多くの著者たちに共同で伝記を書かせたといわれてきた。フェルディナント・グレゴロフィウス (Ferdinant Gregorovius) は次のように記している。「資料の量が、まさしく科学的な見地から伝記の研究を分業で行う必要性を生じさせた。そしてこの分業が、個々の部分を取り扱う際の大きな特色にならなくてはならなかった¹⁰⁾」。非常に多くの資料が提供され、公にされたので、それまでに出ていた小さな伝記は、資料がより完備されたというだけで凌駕された。しかしすでにこの著書の形態には、編集者が調整できなかった飛躍が認められる。たとえばユリウス・レーヴェンベルク (Julius Löwenberg) は、1829年のフンボルトのロシア旅行を、すでに1804年に終了したアメリカ探検と密接に関連づけて取りあげている。この書物はよく引用されるが、全部読まれることは稀であった。今では、ありとあらゆる異論よりも感謝の念の方が強く、系統的なフンボルト研究の最初の試みとしてのこの著書は、19世紀の知識の源泉であり、事実次の研究の出発点となったという意見が出されている。ブルーンスの編集では、アルフレッド・ドーフェがフンボルトの生涯の結末について記述することを任された。ドーフェは理解力なしという神髄を露呈し¹¹⁾、それ以来、彼には厳しい反対意見が持ち込まれることになっ

た¹²⁾。それでも彼の寄稿は、文学上はあらゆる点できわめて読む価値のあるものであり、またきわめて根拠のあるものである。彼は、フンボルトと親交のあった著名な気象学者ハインリヒ・ヴィルヘルム・ドーフェ (Heinrich Wilhelm Dove) (訳注：1803～1879, ベルリン大学物理学教授, プロイセン気象研究所所長) の息子であるにもかかわらず、ゲーテによって明らかに価値を認められた人物の科学的な業績や、実際の成果に対する理解が驚くほど欠けていた。——第3巻は、あらゆる分野におけるフンボルトの科学的業績についての分析から成っている。すぐれた専門家たちによるこれらの寄稿もまた、今でも教訓的な証言を少しも失わなかったし、ますますわれわれの注目に値する——これらには同時代の証言が忠実に保存されているという理由だけであるが。

そのうちに個々の寄稿の中には、地理学上の位置付けに関する一連の試論が出された。しばしばフンボルトを取りあげているオスカー・ペシュル (Oscar Peschel) は地理学者であり、ブルーンズの書物の第3巻についても協力した。彼はそこでとくに次のように確認している。「アレキサンダー・フォン・フンボルトの偉大さは、彼以前の時代にはただ土地に関する知識 *Ortskunde* (トポグラフィー *Topographie*) であった地理学 *Erdkunde* を、多様な新しい課題を加えて豊富なものとし、地表空間の自然科学 *Naturkunde* にまで高めたことにある。この意味で、われわれは彼の業績の全体像を描くことを強いられよう。というのは、彼の生理学研究という唯一の例外はあっても、彼が科学を促進させるために貢献したことすべてが、地理学の奨励であるとも考えられるからである」。これによってペシュルは、明らかに地理学におけるフンボルトの科学上不滅な業績を考察することに同意したわけであり、同時に注目すべき、またもちろん根拠のある見解を明らかにしたのであった。彼はフンボルト研究に、きわめて価値の高い認識につながる将来の展望を与えたのであった。この時以来、ドイツの地理学者たちのフンボルトとの中断することのない議論の鎖を生み出してきた。この鎖はその不変性と、鎖を構成する環の多さなどの様々な理由から、問題を提起してくれているはずである¹³⁾。アレキサンダー・フォン・フンボルト以後の人々の中で、彼を地理学の重要な代表者として賛嘆しないような偉大な地理学者はいない。偉大な医学者・物理学者・天文学者・数学者・化学者としての彼は、その個別科学上の多様な業績にもかかわらず、これらは問題にはならなかった。たとえば天文学(経緯度の測定など)や歴史の記述についての彼の画期的な業績は、常に彼の地理的観念の世界と解きたい関係にある。これらの特色を明らかにすることは、現在でも確かにきわめて重要な研究課題である。

ブルーンズの伝記が引き起こしたうずには、これ以上適切な貢献はなかった。1871年の帝国建設は、国粋思想に明らかに合致しているとみられるヴィルヘルム・フォン・フンボルトを重視させるようになった。アルベルト・ライツマン (Albert Leitzmann¹⁴⁾) (訳注：1867～1950, イエナ大学ドイツ文学教授, フンボルト研究家) はこの時代に、基礎的なヴィルヘルム・フォン・フンボルト研究とゲオルグ・フォルスター (Georg Forster) 研究を出版したが、われわれはこれらの研究に満足することはできない。書簡の出版はみな、弟アレキサンダーに関する新しい指摘も含んでいたもので、彼の周囲の世界へ新たな光が当てられ、どんな点でも研究をさらに前進させる結果となった。アレキサンダーの人気はその間にもほとんど力を失わなかったが、兄ヴィルヘルムにふさわしい歴史的研究は生まれ

なかった。個々の書簡集が多くの功績を伴って出版されたにもかかわらず、第二ドイツ帝国においても、ヴァイマル共和国¹⁵⁾においてもこうした事実は少しも変わらず、まさにこのフンボルトにとって好意的な、確固とした伝統はぐくまれてきた。

フンボルトの業績をうわべだけでも知っている者はみな、彼が第三帝国の船首像として利用されなかったことに気付いている。それでも国家社会主義の文学史家であったヴァルター・リンデン (Walter Linden) 博士は、とくに1940年に、当時広く行われていたドイツ史の「新たな理解」を実行するに際し、大ヨーロッパ空間という新しい「世界像」へフンボルトという人物を組み込んだ。リンデンは非常に博識であったが、しかし彼の著書は、これ以上困ることはないが、著しい誤解さえしているのである。つまり、フンボルトをこの時代の中で描写できるように、フンボルトの本質的な特色や彼の思想の特色については無視しなくてはならなかった。この著書は1945年以後再び出版されたが、この時には結論だけは改めなくてはならなかった¹⁶⁾。私がこの本を公平に見ても——この本が客観的に書かれたと思われていたとは、第三帝国では、フンボルトをその生涯と業績のすべてにおいて評価することはできなかった。

1945年以降になってようやくフンボルト研究に大きなチャンスがおとずれた。多くの都市と文化的な記念物が破壊され——それと共に多数のフンボルトの書簡や記念物も破壊された。しかし、予想外に多くのものが保存されていた。この欠乏の時代に、再びフンボルト研究が始まった。1945年以後まもなくいくつかの寄稿¹⁷⁾や、粗悪な紙に印刷された何冊かの著書¹⁸⁾が出版されたが、これらの著者たちの間には何の連絡もなかった。占領地区の境界が引かれ、ドイツは分割された。いくつかの、しばしば思いがけない場所で、フンボルトについての純粋な関心が再三再四燃え上がった。私自身経験したことであるが、ハインリヒ・シュミットヘンナー (Heinrich Schmitthenner) はすでに1947年にマールブルクにおいて、系統立ったフンボルト研究を始める計画を意図的に進めていた。1949年12月7日におけるエルンスト・プレーヴェ (Enst Plewe) の講演は、地理学史での新しいフンボルト研究のスタートを表明したように思えた¹⁹⁾。エヴァルト・バンゼ (Ewald Banse²⁰⁾、リヒアルト・ビッターリンク (Richard Bitterling²¹⁾)、カール・ハインリヒ・ディーツェル (Karl Heinrich Dietzel²²⁾) のような何人かのフンボルトの専門家や、マリオ・クラマー (Mario Krammer²³⁾)、ヘルベルト・スクラ (Herbert Scuria²⁴⁾) の著書が活発な議論を展開させた。リヒアルト・ビッターリンクの信頼できる寄稿がどんなに喜ばれ、歓迎されたか、今日誰が想像できるであろうか。ビッターリンクは積極的な文通を続けて、ついには地理学史とアレキサンダー・フォン・フンボルトについて興味をもつあらゆる人々との意見の交換に専心した。彼は個人的にも学者たちを訪問し、ただ彼の関心ゆえに、研究を続行するため多くを費やした。

個人が必要な書簡集出版費用を負担するのは不可能であったため、1947年に『アレキサンダー・フォン・フンボルトの談話』を出版する仕事が始まった。1954年以後は“ドイツ文芸新聞 (Deutsche Literaturzeitung)” の評論²⁵⁾、講演や論文がフンボルト研究をもっと大規模なものにするのに貢献した。その間に、ドイツ民主共和国においても研究計画が成熟した。アーダルベルト・プラット (Adalbert Platt²⁶⁾) はライプチヒにあるザクセン科学アカデミーで、書簡集出版の計画を立てた。この仕

事は、次にベルリンドイツ科学アカデミーのアレキサンダー・フォン・フンボルト委員会（議長：初代・ハンス・エルテル(Hans Ertel)、第2代・エルヴィン・シュトレゼマン(Euwin Stresemann)；書記：フリッツ・ランゲ(Fritz Lange²⁷⁾)；協力者：クルト・R・ビールマン(Kurt-R. Biermann²⁸⁾)、イルゼ・ヤーン(Ilse Jahn²⁹⁾)によって受け継がれた。

フンボルト研究は、1959年の記念すべき年に最大の突破口を得た。多くの論文や、たった4冊、合計1,172ページになるドイツの記念論文集³⁰⁾、1冊の談話集³¹⁾、筆者の2冊から成る伝記³²⁾が出版された。われわれがフンボルト・ルネッサンスを開始したことは、新聞記事、フンボルト名のついた学校の命名、世界の多くの国々でのフンボルト切手の発行、価値ある祭典によって証明された。この記念すべき年の準備、その出版物、会合中の出来事、たとえば両ベルリンにおいて何はさておき公式にVIPと認められた偽者^{に+}の登場、しかしとりわけフンボルトに対する世界的な反響から引き出された結果が、ドイツ連邦共和国においても熱心な注目を集めた。ただこれらの出来事をもっと詳しく調べるだけで実用文化政策の小冊子ができあがり、これを読めば多くの教示が与えられるであろうに。

1959年のフンボルト記念の年は、フンボルトが個性を決して放棄しない自由な人物であったことをもう一度確認させてくれた。

私の伝記は、1945年以後主流となってきた研究上の関心事をはっきりと示している。リヒアルト・ビッターリング、アーダルベルト・プラットのような学者達は、当然のことであるがフンボルトの明らかな地理学上の業績を疑わなかった。しかし、人々はまだもっと正当な伝記上の評価、ドーフェなどによる否定的な評価に対する反証を要求していた。その場合に、地理学上の刺激という豊富な宝物を明らかにするのが当然のように思えた。これが私の伝記研究の出発点である。1955年以来かなり多くの講演において、フンボルトの地理学の特色を一層明確に描いてきたが、伝記では主として他の人たちの研究を取りあげ、典拠としなくてはならなかった。

今日、1945年以後の情勢から生まれた研究上の関心事は解決しておらず、むしろこれはすでに常識になってしまった。その結果、今では個々の人たちによって、たとえば、フンボルトをどのように分類すべきか、といった問題が提起されている。彼はただ一般的な意味で自然研究者であったのか、彼は最後の宇宙学者であったのか、彼は結局、地球物理学者であり、地理学者ではなかったのか、彼はそもそも地理学者ではなくて、むしろ最後の宇宙学者だったのか？ さらに、フンボルトの地理的思考の世界が、非常に遅い時点で形成されたことなどが信じられている。その間に研究は個々のテーマを取りあげたり、文書・報告の編集をすることで進められたが、これに対して突込んだ問題はただともかく真面目に取り上げるべきであるという主張をするという段階に達しただけであった。方針もなく顕微鏡的に見るのはとりわけ奇怪^{グロテスク}である。同一の筆者が短期間のうちに次のように論述している——これらの見解は少なくとも事例として選んでいるのであるが——フンボルトは「最後の宇宙学者として……、また自然を観察する科学や同時に地球科学 Erdwissenschaft の基礎」(1964)を築いた；彼は「科学的地理学の創設者」(1965)である——これは経験主義者のフンボルトを神とほぼ同列に置く見解である。しかし、これらの主張もまた有用である、というのは、それは共通の努力を強いるからである。すでに非常に古くからの地理学上確固としたその研究についての評価が定まっていない

ならば、ペシエル、ラッツェル (Ratzel), リッヒトホーフエン (Richthofen), ペンク (Penck), ヘットナー (Hettner) からヘルマン・ラウテンザッハ (Hermann Lautensach), カール・トロール (Carl Troll) までの多くの偉大な人々が、簡単に思い違いをしていたことになる。しかしそのためにアレキサンダー・フォン・フンボルトの地理学の新しい研究の中に、多くの問題に対するカギが横たわっているはずである。結局はフンボルト自身が指示を与えてくれたはずであり、われわれはフンボルトから出発しなければならないのであって、われわれの願望から出発してはならない。

1969年のフンボルト記念の年は、フンボルトの世界的名声を裏付けることになるであろう。彼にちなんで名付けられたベルリンのドイツ科学アカデミーの委員会は、書簡集の出版を開始するであろうし、めずらしいフンボルトの著書の新版が出されるであろう。また映画が上映され、展覧会の準備が行われている³³⁾。その際、ただ専門科学の面だけを見て、フンボルトの生涯と業績に結びついている特別な人間性、彼の絶えざる援助および彼の文芸の奨励を見ない者は盲目である。フンボルトに没頭する者はだれでも、彼の例が不毛の現代において道しるべの光となることを望んでいる。

注

- 1) これについては、たとえば Hanno Beck : *Alexander von Humboldt und Mexiko. Beiträge zu einem geographischen Erlebnis*. Bad Godesberg 1966 S. 41~45. 参照のこと。カール・グスタフ・フォン・ブリンクマン (Karl Gustav v. Brinkmann) あてのヴィルヘルム・フォン・フンボルトの書簡 (Erfurt, 1793年3月18日) は注目に値するであろう : *Wilhelm von Humboldts Briefe an Karl Gustav v. Brinkmann*. Hrsg. u. erläutert. v. Albert Leitzmann. Leipzig 1939, S. 57~62 (Bibliothek d. Lit. Vereins in Stuttgart, CCLXXXVIII).
- 2) Hanno Beck : 前掲 1), S. 46~50.
- 3) 典型的なこうした取りあげ方には、Artur Friedrich Bussenius : *Alexander von Humboldt*. Kassel 1853; 作者不明 : Herman Klencke (*Alexander von Humboldt's Leben und Wirken, Reisen und Wissen. Ein biographisches Denkmal*. 6. Aufl., vielfach erweitert u. teilweise umgearb. v. H. Th. Kühne. Leipzig 1870; 1. Aufl. 1851, 2. Aufl. 1852, 3. Aufl. 1859) と、Wilhelm Constantin Wittwer (*Alexander von Humboldt. Sein wissenschaftliches Leben und Wirken. Den Freunden der Naturwissenschaften dargestellt*. Leipzig 1861) に基づくかなり大きな初期の「伝記」がある。
- 4) 例としては Carl Friedrich Philipp v. Martius : *Denkrede auf Alexander v. Humboldt*. Gelesen in der Kgl. Bayer. Akad. d. Wiss. München 1860. をあげることができよう。
- 5) *Alexander von Humboldt. Eine wissenschaftliche Biographie* Bearbeitet u. hrsg. v. Karl Bruhns. 3 Bde Leipzig 1872, ここでは : Bd. I S. VII f.
- 6) *Briefe von Alexander von Humboldt an Varnhagen von Ense aus den Jahren 1827 bis 1858. Nebst Auszügen aus Varnhagen's Tagebüchern und Briefen von Varnhagen und Andern an Humboldt*. Leipzig 1860; とくに : *Gespräche Alexander von Humboldts*. Hrsg. in Auftrage der Alexander von Humboldt-Kommission d. Deut. Akad. d. Wiss. zu Berlin v. Hanno Beck. Berlin 1959 S. 156, この著書はビスマルクの評価も一緒に行っているようである。 : S. 239 f.; Karl Bruhns 前掲 5) Bd. I S. VII f. ここでも 1861年5月の「生きている痰つばフェルンハーゲンとフンボルト」というフリードリヒ・ヘーベル (Friedrich Hebbel) の見解 (*Tagebücher in vier Bänden*. Leipzig O. J., S. 214) は興味深い。
- 7) 往復書簡 : 次に述べる人々との, Varnhagen (1860), ある若い友人 (1861), Heinrich Berghaus (1863), Correspondance inédite (2 Bde. 1865, 1869), Marc-Auguste Pictet (1868), Christian Carl Josias Freiherrn v. Bunsen (1869), Georg Graf v.

- Cancrin (1869), Goethe (1876), Gauss との (1877), Wilhelm (1880), Wilhelm Gabriel Wegener (1896), Lettres américaines (1905), François Arago (1907), Goethe (1909), Ignaz v. Olfers (1913), Letters inédites (Bonpland) (1914), プロイセン王室 (1928), Achille Valencienns (1964); 全集はベルリンドイツ科学アカデミーアレキサンダー・フォン・フンボルト委員会によって準備中である。
- 8) たとえば Heinrich Wilhelm Dove: Gedächtnissrede auf Alexander von Humboldt. Gehalten in der öffentlichen Sitzung der Königl. Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin am 1. Juli, dem Leibniztage des Jahres 1869. Berlin 1869.
- 9) アルフレッド・ドーフェの表現; Bruhns 前掲 5) Bd. II S. 480.
- 10) *Briefe Alexander's von Humboldt an seinen Bruder Wilhelm*. Hrsg. von der Familie von Humboldt in Ottmachau. Stuttgart 1880, S. LXXXII. 編集者は Ferdinand Gregorovius; 彼の考え方に反論するのは簡単である。フリードリヒ・マイネッケ (Friedrich Meinecke) はこれに対して次のように述べている。「何人かの専門家が、彼らの中にはこの本の一風変わった父がいるのであるが、フンボルトの科学的活動のさまざまな側面を論文風に取り扱っているこの書物 (ブルーンスによって編集されたフンボルトの伝記) において、畢竟全経歴の一部にあたる、とくに1829年以降のベルリン時代のみを記載しなくてはならないとは、芸術上全く有難くない課題であった。ドーフェは災を転じて福となしたが、きちんと、すべての糸をしっかりと包括してまとめた統一ある記述を断念し、その代わりに英雄の生涯、性格、環境を一連の自由な舞台の上で繰り上げた。これらは、すぐれた文化史上の特性の描写にはなり得たが、伝記上は本論を離れた副次的なことを取りあける結果となった」; Friedrich Meinecke: Alfred Dove. *Hist. Zeitschr.* 116 (1916) S. 69~100, ここでは S. 75 f. —1912年10月18日におけるバーデン歴史委員会での乾杯の辞に際してドーフェは、彼自身の人物描写を次のように行っている: 「私は本来学者ではなく、生まれながらの作家であるが、ただ2回だけ困ったことに学者に帰化させられた。最初は40年前にライプツヒにおいてであった。そこで私は、結婚後、教授であった父と義理の父とに非常にすすめられて、グスタフ・フライターク (Gustav Freytag) と共にジャーナリストとして楽しく過ごしていた。しかし私は、将来の生活を保証するために大学教授の資格を得たかった。ちょうど私は若くして、アレキサンダー・フォン・フンボルトについての伝記研究を出した。フライタークは、親切にも教授資格の業績としてこれに注目した。彼はそこで、誰もが模範としていた哲学科の道徳的な翼兵ゲオルグ・クルティウス (Georg Curtius) に問い合わせてくれた。彼はたいへん親切に、しかしきわめて正確に、もし私が教授資格をとっているならば、彼らは私を教授に推薦できるが、それによって講師にすることはできない……と答えてくれた」; 前掲 1916, S. 77 f. —ドイツの歴史の記述には「共著による伝記」という伝統が全くなく、いつも一人の人物が一冊の伝記の責任を負わなくてはならなかった。これについては Hanno Beck: *Die schöpferische Zweiheit. Humboldt. Revista Para el mundo ibérico* 2 (1961) S. 71~74. 参照。
- 11) アルフレッド・ドーフェは次のように記している: 「われわれの科学的認識は直接フンボルトにその発達を負っている——これがこの伝記の批判とする部分になるであろう——こうした発達は大した苦勞をせずに挙げられるし、評価することもできる……彼の業績の価値をこのように特別に考察することは、まだ今日では専門家のほぼ唯一の所有権となっているが、将来いつかは後世の素人にもわかるであろうと見込まれている。……また精神的な成長も、アレキサンダー・フォン・フンボルトにおいては認めないであろう。こうした貴くもあり卑しくもある特色が、彼の長い“波乱に富んだ生涯”の間中、彼につきまとい続けている」。(Bruhns, 前掲 5) Bd. II S. 481, 482, 483).
- 12) ここではエルンスト・プレヴェ (Ernst Plewe) の意見を引用することで十分であろう: 「1870年の伝記では、しかし彼 (フンボルト) に“官廷民主主義者”の極印を押した。半分は弁護的であるが、しかし主義をもたないという非難を明らかに言い表わしているのである。……何が彼を避けるのか、何もない。彼はぶかっこうな老人であり、画家や写真家にとってはもうからない題材であった。彼は研究者ではなく収集家であり、彼の時代の光線を集めるためのゆがんだレンズであった。しかしこの収集自体は失敗であった。というのはそれは美的な観点と記載、そして科学的な意図とが無用に混在することになったからである、とあてにならない低劣な一人

の美文家は書き下した。プロイセン勲章 *der pour le mérite* をもつ特権階級を得るための彼の不断の努力は、宮廷風という外来の特別な主義を科学へもたらし、科学を分解した。また人間としての彼は、ただ些細な人にすぎない。“1,000の狭量な顧慮や低い評価によって濁らされてしまった社会的存在の日常の問題についての把握は、純粹に人間的な高い世界観とは厳しい対照をなしている”。“精神的な成長をもアレキサンダー・フォン・フンボルトにおいては認めないであろう”。事実、誰も彼の名前がもつ栄光をとがめなかったし、“特別に考察することが見込まれている”(とくにフンボルトが何の意味ももたなかったことを)、“いつかは後世の素人にもわかるであろう……”。このような中傷に直面し、フンボルトの深いため息がどんなに正当にひびくことか、重要な対象について気楽な話ができる人は、ベルリン中で三人いないであろうに。すべてまさしくドイツ的であるが、胸がむかむかする」。エルンスト・プレヴェのこの考え方はどんな場合でも正当である。アルフレッド・ドーフェがどんなに伝記の高慢さの奴隷であったかは決して見落とせない。他の人々もまた同じように否定しているので——彼らの中ではたとえばカール・トロール (Carl Troll) (1959) も——、おりにふれて変化する見解には根拠がないと私は思っている。ドーフェの確認は悪意のないものであり、決して名譽き損にはならないであろう。Ernst Plewe: Alexander von Humboldt. Rede zur feierlichen Immatrikulation a. d. Wirtschafts-hochsch. Mannheim am 7. Dez. 1949 (Schriftenr. d. Wirtschaftshochsch. Mannheim, H. 2) Heidelberg 1951, S. 33 f.; Brühns, 前掲5) Bd. III S. 186.

- 13) Lothar Döring: Wesen und Aufgabe der Geographie bei Alexander von Humboldt. Diss. Frankfurt a. M. o. J.; *Frankfurter Geogr. Hefte* 5 (1931) H. 1 参照。

- 14) 直接アレキサンダー・フォン・フンボルト研究に関係する彼の研究からここでは選んでいる。注7)に挙げた *Briefwechsel A. v. Humboldts mit Wilhelm Gabriel Weger* (1896), *Georg und Therese Forster und die Brüder Humboldt*. Urkunden und Umriss v. Albert Leitzmann. Bonn 1936.

- 15) 当時は、とりわけ旅行記の詞花集^{アンソロジー}として、たいていは紹介を備えたハウフ(Hauff)の編集による抜粋が出版された: *In Südamerika* (Reisen und Aben-

teur, 37) Leipzig 1927 (besorgt von Paul Alfred Merbach); *Durch das tropische Südamerika. Aus Alexander von Humboldts Berichten über seine Reise in die Aequinoctial-Gegenden des neuen Kontinents*. Ausgewählt v. W. F. Burr. Berlin/Leipzig 1926; *Natur- und Kulturschilderungen*. Ausgew. v. eingel. v. Karl Heinrich Dietzel. Leipzig 1924; 前掲7), 前掲13) も参照のこと。

- 16) 1940年の結論では次のように述べている。「1939年から1940年に変わる砲声の最中に、最初のドイツ帝国研究船が造船台から離れた。この船は、科学にきわめて高い地位を与えた人の名である“アレキサンダー・フォン・フンボルト”という名前がつけられ、人間性を助成し、民族を結合する力として、また永久に復活する生命を信ずる告知者として兼ねそなえるべき、科学上の特色ある態度をもった芸術上の生き者であった」。(前掲 S. 91)——フンボルトが人種上の高慢さを拒否しているなどは完全に隠されてしまった。

- 17) たとえば: Ludwig Koegel: Alexander von Humboldt als Geograph. *Kosmos* 43 (1947) S. 101~102; Hanno Beck: Ein Ehrenbürger der Erde. A. v. Humboldt und seine Bedeutung. *Werra-Rundschau* 1. Nr. 76 v. 19. 9. 1948, S. 8; Mario Krammer: Ein Bürger zweier Welten. Zur 19. Wiederkehr von Alexander von Humboldts Todestag am 6. 5. 1859. *Berlin Heft f. geistiges Leben* 4 (1949) S. 599~601.

- 18) 次のような著書がある: Willy Möbus: *Alexander von Humboldt, der Monarch der Wissenschaften. Mit einer Auswahl aus Alexander von Humboldts Schriften*. Berlin, Stuttgart 1948; Friedrich Matlick: Entwicklungsstufen im Denken Alexander von Humboldts von seiner Amerikareise, dargestellt an Hand seiner Reizphysiologie. 1947 (München, Med. Diss.); Rudolf Borch: *Alexander von Humboldt. Sein Leben in Selbstzeugnissen, Briefen und Berichten*. Berlin 1948.

- 19) 前掲12) 参照。

- 20) Ewald Banse: Alexander von Humboldt. Eine moderne Studie. *Deutsche Rundschau* 45 (1918) S. 90~128; ders.: *Alexander von Humboldt. Erschliesser einer neuen Welt* (Grosse Naturforscher, 14). Stuttgart 1953.

- 21) Richard Bitterling: Alexander von Humboldts

- Amerikareise in zeitgenössischer Darstellung. Zur 150. Wiederkehr des Reiseabschlusses aus dem Franz. übers. u. eingel. *Petermanns Geogr. Mitt.* 98 (1954) S. 161~171.
- 22) カール・ハインリヒ・ディーツェルは最後のドイツの植民地理学者であり、1946年以来マールブルク大学の演習においてしばしばアレキサンダーに言及している。彼はすでに1924年に前掲15) にあげた書物を編集している。
- 23) Mario Krammer : Alexander von Humboldt. Mensch, Zeit, Werk. Berlin/München 1951.
- 24) Herbert Scuria : *Alexander von Humboldt. Sein Leben und Wirken*, Berlin 1955.
- 25) Hanno Beck : (Sammelrezension en der Alexander-von-Humboldt-Literatur). *Deutsche Literatur-zeitung* 75 (1954), 84 (1963). 参照。
- 26) Adalbert Platt : Vom Orinoco zum Amazonas. Wiesbaden 1958; ders. : Heinrich Brockhaus und Alexander v. Humboldt. *Börsenbl. f. d. Dt. Buchhandel* 20 (1964) S. 1589~1593; ders. : Goethe y Alejandro de Humboldt. *Humboldt* (1965) S. 41~47.
- 27) Fritz Gustav Lange : Bildnisse Alexander von Humboldts. Einführende Worte (zu 23 Tafeln). *Alexander von Humboldt.....Gedenkschrift zur 100. Wiederkehr seines Todestages*. Herg. v. d. Alexander von Humboldt-Kommission d. Dt. Akad. d. Wiss. zu Berlin. Berlin 1959, S. 445~458; ders. : Alexander von Humboldt und Paulus Usteri. *Unbekannte Jugendbriefe Humboldts*. *Beih. 1964 z. Schriftenr. Gesch. d. Naturwiss., Technik u. Med.*, S. 217~225.
- 28) Kurt-R. Biermann : Zum Verhältnis zwischen Alexander von Humboldt und Carl Friedrich Gauss. *Wiss. Zeitschr. d. Humboldt-Univ. zu Berlin. Math.-naturwiss. Reihe* VIII (1958/59) S. 121~130; ders. : Ueber die Förderung deutscher Mathematiker durch Alexander von Humboldt. *Alexander von Humboldt.....* Berlin 1959 S. 83~160; ders. : Johann Peter Gustav Lejeune Dirichlet. *Dokumente für sein Leben und Wirken*. (Zum 100. Todestag; Abh. d. Dt. Akad. d. Wiss. zu Berlin. Klass. f. Math., Physik u. Technik Jg. 1959, Nr. 2) Berlin 1959.
- 29) Ilse Jahn : Die physiologischen Experimente des jungen Alexander von Humboldt in den Jenaer Laboratorien. *Mitt. bl. Ges. exper. Med. der DDR* 1965, Nr. 3 S. 44 f.
- 30) この場合には、外国でドイツ人が編集した記念論文集は含まれていない。
- 31) 前掲6) 参照。
- 32) Hanno Beck : *Alexander von Humboldt*, Bd. I : *Von der Bildungsreise zur Forschungsreisen 1769~1804*; Bd. II : *Vom Reisewerk zum "Kosmos" 1804~1859*. Wiesbaden 1959, 1961.
- 33) ドイツ連邦共和国においては、上述の記念刊行物以外にとくに次のようなものが出されている。ハノ・ベック (Hanno Beck) とヴィルヘルム・ボナカー (Wilhelm Bonacker) による概説がつけられたフンボルトの "Mexiko-Atlas" の新版; 概説のついた3冊から成るフンボルトの "Relation Historique", Nr. 2, 3. (F.A. Brockhaus, Stuttgart. "Quellen und Forschungen zur Geschichte der Geographie und Reisen"); 概説のついたアメリカ熱帯におけるフンボルトの旅行についての通俗的な概要; シュトゥットガルトのドイツ国際関係研究所によって準備されたフンボルト展覧会; フンボルトの映画 (テレビ用としても)。

アレキサンダー・フォン・フンボルトの談話に寄せて (訳)

フンボルトは、ドイツ人の間でも語り合いが可能であるということを私に気付かせてくれた唯一の人である。

ハインリヒ・ヴィルヘルム・ドーフェ (Heinrich Wilhelm Dove) (訳注 : 1803~1879, ベルリン大学物理学教授, プロイセン気象研究所長), 1869年

1959年に『アレキサンダー・フォン・フンボルトの談話』の刊行が完了した¹⁾。フンボルトは、個

人的な発言をむしろ好んで破棄してきた。というのは一つの事実はさまざまに評価されるからである。しかし、話し相手が日記や書簡、スケッチに書き留めている場合には、彼は自分がした話、その話の新鮮さ、精神、魅力を消すことはできなかった。モンクトン・ミルンス (Monckton Milnes) は、1844年12月にベルリンを訪ねた後、備忘録に二、三の価値あるフンボルトの言辞を書き留めていた²⁾。当時アレキサンダーは、たとえば「彼こそあらゆる旅人の永遠の父」であると信じられていたという。

フンボルトの書簡は割合用心深い筆致で書かれているが、愚かな質問、あるいは聡明な問に対する素早い返答の中では、かなり無頓着に彼の唇から名案を浮かべることができた。舌のよく動くおしゃべり家であり、魅力のある人であり、また漫談家、皮肉屋であり、社交家であることが、彼の談話からよりよく理解させずにはおかなかった。この考え方が正しいことは、『アレキサンダー・フォン・フンボルトの談話』の刊行にともなって生じた反響³⁾によって証明された。この浩瀚^{こうかん}の中で、賞賛と非難とが巧妙に混ざることなく、情け容赦もなく報ぜられているが、ここでもまた踏襲されるであろう。読者が、フンボルトはただ尊敬されるのだと信ずるならば、それは思い違いである。彼を全く理解せず、彼に不可欠な外交術を見抜かず、老年の脆弱な彼にほほえみかける人々は多かった。全体として私の著書では、彼が人間的な弱さをもっていたにもかかわらず偉大であり、自由であり、民主的であり、また高貴であったことを明らかにしてきた。

1959年から現在に至るまで、読者や同僚たちが私にその他のフンボルトの談話を教えてくれたので⁴⁾、最初私は、遅くとも1969年には第2巻の形で大幅な増補が必要であろうと考えた。しかし、他の人々や私自身によって発見された彼の談話を検討してみると、まったく反復であることがわかった。王室の輪の中で誰にも発言の機会を与えずに永遠に朗読する老人の姿は、たとえば両親へ送ったエルンスト・クルティウス (Ernst Curtius) (訳注：1814～1896、ベルリン大学古代言語学教授) の書簡⁵⁾の中や、ビスマルク (Bismarck)、宮廷付きの俳優ルイ・シュナイダー (Louis Schneider⁶⁾) (訳注：1805～1878、フリードリヒ・ヴィルヘルムIV世付の俳優) によってしばしば繰り返されていた。私は、自分がフンボルトの伝記の中で、アレキサンダーの挙動を明らかにした⁷⁾と今でも確信している。こう解釈するのは、たとえばカール・グツコー (Karl Gutzkow) (訳注：1811～1878、ロマン主義後のドイツ文学界を支配した「若いドイツ」の指導者であり作家) の次のような記載から明らかなように⁸⁾、証人がいるからである。

フンボルトの去来は大ラッパの吹奏を伴っているようであった。シェイクスピア劇の王たちはそういう風に登場してくる。ベルリンで私は、彼と並んで座するという栄誉ある席に座ったことがあるが、「二つの世紀の変換点」の息子とみられているフンボルトが、ベルリンの学者の世界を良くは思っていなかったことを思い出す。ただ一人アウグスト・ベック (August Boeckh) (訳注：1785～1867、ベルリン大学古代言語学教授) だけは、彼の厳しい判断から除かれていた。フンボルトは、ベルリンの学者たちにあって「ヘルダー精神での普遍的教養と人間性がますます薄れていく」のを嘆いていた。確かに誰でも、研究者として自分の専門分野には十分精通していても、教養において一般・哲学・文

学分野をおろそかにしがちである。それを受け入れようという意識すら今日の教授連中には欠けている。

彼は一つの非常に興味あるテーマを長々と述べることはしなかった。私があえて解釈するならば、彼がかなり繊細な触手をこのようにひっこませるのは、政治的な雰囲気のためであったであろう。誰でも自分の畑を静かに耕し、その畑を注意深く見守るものである。しかしフンボルトは、一つ的话题から他の話題へと飛躍した。招待客の数が20名になったとしても、この親切な人はたとえ一瞬であっても、宴会の座で一人一人みんなを君主のように生き生きとさせることができた。概して彼は一人でしゃべった。他の人々には、隣の人と小声でささやくことだけが許された。隣人とささやき合う勇氣をもったとしても、講演を続けている座の頂点に再び耳を傾けてみると、話題が変化しているのに驚くのであった。ちょうど最近の頭蓋骨の発掘が話題にされていた。「塩つぼを取って下さいますか」。左側の人がそれを渡す。このわずかな中断の後、人々は再び聞き耳を立てる。ここではもう、古代アッシリア人の楔形文字が議論される。サラダやいろいろなコンポート〔砂糖煮の果実〕が出されるようになって初めて、来客は自分の意志で話の間をいく分自由に利用するのであった。ティアガルテンの木々の下でコーヒーを飲む頃に、みなはほっとした。この偉大な人物は立ち上って、そこからポツダムへ立ち去った。

宮仕えでは、彼は何事も軽視しなかった。彼の主義は次の通りであった：私は君主を取り巻いて、彼の私に対する友情を確かなものにす。気が変って非常になめらかな裁判官の席に着くこともないだろう。まさに日直日の他のあらゆるウッカーマルク（訳注：ベルリン北東の地方名）の高官と同じ様に、宮中勤務をする。私はただ、科学にとって必要とするものを追求するだけです。ただ時おり退屈が私に、何か新しいことがありますか、フンボルト？ と尋ねるだけです。私はただ次のように答えることができます：もちろんですとも、アジアへ行きたがっている旅人がいますよ。出版するために古写本を見つけ出した学者がいますよ。芸術家たちはその帙（^{ちっ}和装の書物を包むおおい）を役立てたがっていますよ。大王の下で何かをやり遂げようと思う者は、用事のない一瞬のうちにそれらを得て、しっかり保持してはなりません。以上は私の再現によるが、ほぼフンボルト自身の言葉でもある。多分彼は、連邦議会の議事録を通して、文学での私の名の存在を知っていたらしい（訳注：1835年にドイツ連邦議会はグツコーやハイネの著作出版を禁止している）。

もちろんフンボルトはひとりでただ演説をするだけではなく、進歩していく若い学生たちや、博学なあらゆる年代の人たちの話に耳を傾けるのも好きであった。じっさい、人々はよく彼に談話を期待した。彼がサロンに入ってくると、たいていすぐにどんな歓談でもやんでしまった。彼はよく宮廷で生活し、世界の半分と文通し、その時代を代表する男女と知り合いであった——彼の話に耳を傾けるなら、最も本質的なことを学び、最も信頼性の高いことを知ることができるという得があった。彼には十分に、間断なく話しをすることが期待されるか望まれていたので、賢い観察者なら、彼は中断を避けるため息をつくことすらない、とすることができるほどであった⁹⁾。カール・フォン・ホルタイ（Karl von Holtei）（訳注：1798～1880、シュレーゲン人の詩人）は著書『ロバの大食家（Esels-

fresser)』の中で、好ましい対話の場面にあるフンボルトの挙動を、それはかれが好きであったことは間違いないが、うまく述べている¹⁰⁾。

彼がヴァルター (Walter) の家に入ると、まず居合わせた人たちみんなの歓声がわき起った。ティルス (Titus) 皇帝 (短く刈ったちぢれ毛の人) は敬虔な司祭を追い出しはしなかったのであった。それから彼らが再び席に着くや否や、クララ (Clara) は女主人の特権を使って、鯨に——何をいってるかって? 博学な海の怪物に、遊ぶための小さな樽を投げつけたのであった——皆の耳は開いたままであった。しかしその小樽の中には、科学だけが詰められて貯えられている必要はなく、世界や町の手あたりしだいのニュース、それどころか小さなスキャンダルがその中に含まれていてもよかった……。それでもこの巨人はこの樽で遊び、その一部がこわれるほど樽を回転させることを知っていた。こうすることによって、英知、機知、風刺、経験、記憶、普遍的な教養、そしてついにはちょっとした意地悪いが、いたずらっぽい温厚さと混ざりあって現われるのであった。彼がいつも話す用意をしている言葉には、何とも言いようのない流暢さがあり、これはただ彼にだけ与えられた資質であるので、彼が実に書斎から人中へ出ただけで、彼のしたいことが伝わって来るのであった。これについてシャミッソー (Chamisso) (訳注: 1781~1838, フランス出身のドイツ人、詩人であり植物学者) は、国王の好意的な思いつきを述べている: フリードリヒ・ヴィルヘルム (Friedrich Wilhelm) III世は、周知のように大きな城に住むのではなく、いわゆる「王妃宮殿 (Prinzessin-Palais)」につながった彼の「邸宅」に住んでいた。われわれがそう呼んでさしつかえないならば、親愛なる君主はここで私的な宴会を催していた。ある日ここで食事をするようになった。小さな宴会というには客はあまりにも多く、しかし大きな宴会というには少なかった。このためティム (Timm) 侍従は、宴会中に音楽が必要かどうかを国王陛下に問い合わせた。今日は必要ない、と国王は断を下した。フォン・フンボルト氏が饗宴に加わった。この偉大な哲学者が宴会中の音楽に先天的に嫌悪感を抱いていることに配慮したのか、あるいは哲学者が話すことによって音楽の代りをつとめるから必要ない、と解釈するのかは、侍従の判断にまかされた。ある夕方にヴァルターの家で、この偉大なる弁士は、人生における最も重要な三つの力 (Puissance) については、彼の著名な兄ヴィルヘルム (Wilhelm) とほぼ同じであることをふと洩した。ヴィルヘルムは敬虔な信仰心とロマンチックな愛は認めたが、——音楽を決して理解しなかった。彼が付け加えて言うには、最初の力については、私は説教師シュタルク (Stark) のところに静かに赴いて、この力が効力あるようにしなくてはならない。2番目については、クララ・フォン・ヴァルター夫人がどんな不信仰者をも迷いを解いてやる能力をもっているであろう。それゆえ私には音楽だけが残されるが、私はわれわれを音楽によってあれこれと強迫するような会合の楽しみに対しては、あらゆる力をもって抵抗する——もちろん、私の友人メイヤーベール (Meyerbeer) (訳注: 1791~1864, ドイツ人作曲家) が私の話を聞かず、また私がメンデルスゾーン-バルトルディ (Mendelssohn-Bartholdy) 市参事会員の家で、この家の息子である幸福なフェリックス (Felix) の味方をしない時だけであるが、そこでは、彼らは私を決して裏切らず、最も大きな自由がある。

こうしたカール・フォン・ホルタイの詳細な記述をアドルフ・ベルンハルト・マルクス (Adolf Bernhard Marx) が書いた追憶¹¹⁾と比較してみるとおもしろい。以下にわれわれが引用した本の節には「メンデルスゾーンの家 (Das mendelssohn'sche Haus)」という題がつけられている。マルクスは次のように書いている：

息子の友人や娘の友人の華麗な環が、その家族を囲んでいた。かなり古くからこの家の知人であったアレキサンダー・フォン・フンボルト、ファルンハーゲン・フォン・エンゼ (Varnhagen von Ense) (訳注：1785～1858, フンボルトの友人で作家), ガンス (Gans) (訳注：1798～1839, ベルリン大学法学教授) 教授、この家の主人の賢い弟であるヨーゼフ (Joseph) (訳注：1770～1848, 兄アブラハム・メンデルスゾーンと共にメンデルスゾーン銀行を設立した。フンボルトの友人) ……の中で、この青年は抜き出していた。ここで私は初めてアレキサンダー・フォン・フンボルトという重要な人物と向かい合った。すでに私は、自然科学分野には素人である私が知りうる程度で、その人のすべてに優れた業績について知っていた。彼は創造し、活動するという形を通して、まことの王のような地位についていた。彼は旅行、名声、交際を通して、あらゆる国（とくにロシアも）に精通し、また影響力も強かったので、研究や遠方への旅行に際して、多くの割合若い学者たちを援助する機会があった。そのため彼の周囲には一つのサークルが、私はあえて一つの宮廷国家と呼びたいのだが、出来上がっていた。これはかなり若くて重要な知識階級からなり、きわめて活動的なサークルであった。彼らはフンボルトから影響や、しばしば助言を受けたが、次には彼らの研究と協力によって、フンボルトから受けた援助を多くの精神的な利益で報いた……当時フンボルトは自分の協力者を、その中にはレヨウネ・ディリヒレット (Lejeune Dirichlet) (訳注：1805～1859, ベルリン大学・ゲッチンゲン大学の数学教授) がいたが、その後有名になった磁気の観測と、同時にその全地球上への前哨線の拡大に忙しかった。自然科学は、精神生活のためにあらゆる方向から栄養を受け入れ、そしてあらゆる方向へ新しい活気を与える中心として、こうした一人の人を必要とした。

今や、それゆえ私はたぐい稀な人と向かい合うはずであった。彼が静かに入って来た時、広間はかなり混んでいた。身軽で大きくはない彼の身体が、隅に場所を占めるため人々の間をすり抜けて行った。その瞬間部屋の中心も移動したかのように思えた。みんなは彼の方へ動き、彼の周囲にいく重にも環をつくった。彼は、しかしすぐにここへ移り、またすぐにあちらへと移った。私は彼が各人に、その人の専門分野から忠告を与えているのを知った。たとえば、言語学者にはカヴィ語に関する彼の偉大な兄ヴィルヘルムの不滅の業績から教示を与え、実業家には南米の景気についての注意を与えていた。彼は私の所へやって来て、イタリア音楽とスペイン音楽の歴史から二・三の所見を述べた。私はその所見が完全に正しいと合意はしなかったし、むしろ顔色だけで疑念をはさんだ。私がカトリックの教会合唱団にスペイン人・オランダ人とイタリア人との融合が見られることを——「あなた自身ローマで観察したように」——と指摘し、対比するためにルター (Luther) からバッハ (Bach) までのドイツ音楽を選んだことを、彼は不愉快には思わなかったようであった。

同じような描写の機知は、チャールズ・ハレ卿 (Sir Charles Hallé¹²³⁾) の行間にも表われている。彼はフンボルトが——兄ヴィルヘルムと同様に——音楽に「社会的な災い」だけを認めていることを知らなかった：

別の、もっと注目すべき人物はアレキサンダー・フォン・フンボルトであった。私は彼に数回、友人〔銀行家アウグステ (Auguste)〕レオ (Leo) の家で会ったことがある。彼はこの時代の最も賞賛すべき人物である。招待状に「フンボルトを迎えて」という言葉がある時には、会場は普通混み合い、彼は衆目注視的であった。彼が立つ所にはどこでも、熱心な聞き手の群が彼をとり囲んだ。みな無言で、敬意に満ち、彼の唇から漏れるすべての言葉を聞くのに余念がなかった。彼は決して対話という言葉のもつ真の意味でそれをリードしたり、始めたりしようとはしなかった。彼はいつも、ある論題や他の論題について講義をしながらひとりで話した。他のどんな人の意見も決して聞こうとはしなかった。私は一度彼のために演奏を頼まれ、この招待を生涯の一大事と考えた。部屋の中はつかのまの静けさであった。私が演奏を始めた瞬間に、フォン・フンボルトは明らかに最も興味深い新しい話題を取りあげ始めた。彼の声は、私のすべてのクレッシェンド〔漸次強音〕と共に上昇し、私の最も強力なフォルテを制し、再び普通のレベルに戻ったのは、私が最も弱音の音句を演奏する時であった。これは、私の方が長くは耐えられないデュエットであった——「私は背のうを荷造りし」、彼との「戦場」を放棄した。それは彼が講演している人々の利益を考えたからであることは間違いない。

フンボルトの談話をさがしていると、個々の談話の断片どころか、しばしば一冊の書物の一部や章全部を占めるまとまった記述にぶつかった。チャールズ・バベッジ (Charles Babbage) (訳注：1791あるいは1792～1871、イギリス数学者) の回想録からこの例を挙げてみよう。彼は、フンボルトによって組織された1828年のベルリンでの自然研究者会議への参加者であった¹³⁾：

フンボルトの知性上最も注目すべき特色の一つは、彼が科学をただ科学として愛し、追究するだけでなく、彼の知識を利用して他の人を援助することから楽しみを引き出し、どんなにつまらなくても、それが必要にちがいないと思われる他の探究者へ助言することにあつた……。

私は朝食の時、何人かのフンボルトの友人に会った。彼らの名前や評判についてはよく知っていた。

フンボルトは、私がドイツ人学者の大きな会合に出席するためベルリンを訪ねたのだと思って非常に喜んだ。彼らは2～3週間のうちに、この首都に集る予定であった。私は、会合が予定されていることをまったく知らず、ただ彼と交際する楽しさを味わうためベルリンへ足を向けた、と言った。私はすぐに、この大規模な学者の会合が国王によって、またドイツのあらゆる科学によって支えられ、会合自体が、将来の人間の知識の発展へ大きな影響力をもっているはずであることに気付いた。朝食のテーブルの間にはディリヒレット (Dirichlet) [ペーター・グスタフ・レヨウネーディリヒレット (Peter Gustav Lejeune-Dirichlet) とマグヌス (Magnus) (訳注：ベルリンの物理学者) がいた。朝のうちにフンボルトは私に、彼自身の義務は毎日3時に国王に参会することであり、また大掛かり

な学者の会合を準備しているので、私がベルリンのいろいろな研究所を見学する際に、彼が望む程にはお伴ができないことについて言及した。彼は、こういう事情なので、二人の若い友人ディリヒレットとマグヌスに代理を頼んだ、と話してくれた。ベルリンで過ごした何週間かの間、私は毎日この思いやりのあるフンボルトの行為をありがたく思った。若い友人のうちどちらか一人に、またしばしば二人に伴なわれて、私はきわめて効果的にあらゆるものを見学し、多くの見聞と教訓を得ることができた。これらは、条件が悪かったらできなかったにちがいない。

翌朝、私は再びフンボルトと朝食を共にした。前日、私は地図製作で使用する記号を集めていると話した。私はこの時、フォン・ブーフ (von Buch) (訳注：1774～1853、地質学者でフンボルトの友人) とリュール (Rühl) 将軍 [ヨハン・ヤコブ・オットー・アウグスト・リュール・フォン・リニンシュテルン (Johann Jakob Otto August Rühle van Linienstern)] に会った。二人ともこの問題について深い知識をもっていた。私は、等高線の原理に基づいて濃淡をつけた地図の見本を探したが無駄であった。フォン・ブーフは翌朝私に、この原理に基づく小さな地図の彫版をくれた。これは当時、現存したただ一つのものであると私は信じている。

朝食後、われわれはフンボルトが見せたがっていたものを見に書斎へ入った。彼は、私がよくやるようにテーブルの上に乱雑に載っていた書類を引っくり返し、一枚の手紙の入った封筒を選び出した。手紙には、何行も平行に名前が書かれていた。「これは」、彼はついでによく確かめて、「あなたに差上げるものです」といった。われわれに彼の書斎を訪ねた目的の物を見せた後、彼は私に握らせた封筒に話を戻し、当時ベルリンにいたすぐれた人々、その中の何人かは私が探していた人であったが、を私のために大雑巾に分類してあると説明した。彼が分類した人々は：——科学者、文筆家、彫刻家、画家、それに一般には芸術家と考えられている器具製造者や会社であった。このリストは大変参考になることが分かった。

会合中、ベルリンはお祭り騒ぎであった。われわれのパーティー前日のある晩、私はフンボルトと一緒に、われわれの博学な何人かの知人の特性について議論しながらリンデン歩道を歩いた。私の話相手は、多くの鋭い、また大変おもしろい批評をした。これらの批評のいくつかは、いく分辛辣であったが、一つも不愉快なものではなかった。私はこの対話には少ししか貢献できなかった。その時、時計がなり、われわれの訪問の時間が来たことを知らせた。私と握手し、英語で「われわれが再び会う時まで、お互いのことを話さない方がいいと思う」といった時に、顔つきを和らげたちゃめっ気あるフンボルトの表情を、私は決して忘れないであろう。われわれはそれから、お互いに銘々の約束を守り、最も珍しい時に再会した。それはメンデルスゾーン家でのコンサートの時であった。

フンボルトは選挙によって選ばれた会長として、1828年9月18日にベルリンにおいて自然研究者会議を開催し、個人的な人間関係が生まれる可能性を歓迎し、「対話が疑問を解明する力」を賛えた。彼は、生まれながらの漫談家であるだけでなく、談話では修辞学の恩恵を受けていた。今日未だ、彼の公の演説や講演について概観したものはない。全体に彼はどんな時にも、常識では考えられないほど多く発言した。ベルリン大学とベルリン声楽学校における「自然地理学 (Physikalische Geogra-

phie)」についての講義は、彼の修辞学的技巧の極致であるとみなされている。批判的な声を聞いた人は、批判する人々が当時いかにフンボルトの人となり魔法の域にまで達していたかに気付くであろう。彼は控え目に、はにかみながら無名の図案家が下絵を書いた講壇の斜面机に進んだ。彼は、始めはためらいがちであったが、時々二、三のメモ用紙を使いながらのびのびと話した。彼の演説は、まさにそれが「講義」でなかったので人々を熱狂させた。同じような才気は、彼の対話においても明瞭である。ほとんどいつもそれはちょうちんもち連中の卑劣な感覚であったが、それは——とりわけ高齢になってから——彼の話の単調さを非常に増巾しただけであり、ただ「あごの運動」へ話を落としてしまうといった流儀であった。この点でも、カール・グツコー (Karl Gutzkow) はもっと深く観察し、もっと正しく評価すべきであった。

次のフンボルトの対話は、1959年の私の著書において確証されたのと同じ配列で、挙げられている。(たとえば: I, 155 f. 対エルンスト・ヴィルヘルム・マルティウス (Ernst Wilhelm Martius): エアランゲン, 1793年10月21日およびパイロイト1793年. (I, 155 f.: 索引 No. 1 と155 ページを示している。『対』の前には毎度「アレキサンダー・フォン・フンボルト」が補われる。) 著者による補注には、番号をふってある。))

I, 155 f. 対エルンスト・ヴィルヘルム・マルティウス (Ernst Wilhelm Martius): エアランゲン, 1793年10月21日およびパイロイト1793年.

マルティウスは、1793年にエアランゲンの化学教授フリードリヒ・ヒルデブランドト (Friedrich Hildebrandt) の聴講生であった。彼は次のように報告している:

私が彼の最初の化学の講義を聴講した時、一人の見知らぬ人の隣に座ることになった。その人は化学にたいへん詳しかった。ブロンドで青い目の若者であり、非常に活発でまた礼儀正しかった。授業の後で、私は彼すなわち後にドイツ国家の誇りであり、誉れとなるアレキサンダー・フォン・フンボルトと知り合いになった。彼は1792年〔9月6日〕に、フィヒテル (Fichtel) 山地における鉱山、おもにフルステン (Fürsten) 鉱山とゴルトクロナッハ (Goldkronach) の鉱山地域における他の鉱山を調査するため、プロイセン政府によって上級鉱山監督官に任命された。これらの鉱山は、かつて豊かな金の産出によって知られていた。ゴルトクロナッハ鉱山地域から産出される鉱塊は、ハンガリーの金塊や銀塊に似た美しい外見をしていた。この貴金属は硫黄・砒素と共に鉱化し、ピカピカ光る粒として石英内に混っていた。フォン・フンボルト氏は、砒鉱場を建設して、ボルン (Born) のアマルガム製錬を導入する予定であった。しかし、大変な難事業であることがこの製錬の障害となった。彼は、水没したシュテーベン (Steben) の鉱坑の一部に、大規模な坑道(「フリードリヒ・ヴィルヘルム (Friedrich-Wilhelm) 坑道」)を利用して入れるようにする計画も立てた。この計画は、後にバイエルン政府によって取りあげられ、巨大な事業は完成された。

初めて知り合って間もなく実施した鉱物学の旅行中、私はパイロイトにあのすぐれた自然研究者を訪ねたが、彼がどんなに好意的に、私にフィヒテル山地における地質学上の多くの状態について、中

でも緑岩の産出について、非常に早口で、しかも生き生きした言葉で教えてくれたか、今でも忘れることはできない。当時、彼はフライベルクにおける著名な師ヴェルナー（Werner）（訳注：1749～1817, 岩石水成論者、フライベルク鉱山学校教師）の理論を受け入れていた。しかし、後に三つの大陸で大きな経験をしてからは、この理論に必ずしも満足することができなかった。

2, 483. 対フランシスコ・ホセ・デ・カルダス・イ・テノリオ（Francisco José de Cálidas y Tenorio）（訳注：1771～1816, 南米の地理学者）：イベラおよびキトー、1802年1月2日から7月終りまで。

ヘルマン（Hermann）、A. シューマッハ（A. Schmacher）は次のように記している：

カルダス（Cálidas）は温度計を利用して高度を測定するという発見を、決してオリジナルなものとは主張しなかった。彼は1802年に次のようにいっている……。「私は、シゴー（Sigaud）（訳注：1730～1810, フランス人、イエズス会会員で自然研究者）の著書を読んで、温度計や、ヘベルデン（Heberden）氏によってなされた実験を利用して、山の温度を測定するという方法を知りました」。この箇所は“J. R. シゴー・ドゥ・ラ・フォン（J. R. Sigaud de la Fond）、理論・実験物理学初歩：Elémens de physique théorique et expérimentale III.（Paris 1787）S. 203”にある。カルダスは、しかしながら換算式を修正したことを口にし、その問題に関してフンボルトと話した。この対話について彼は次のように記している：「初めての対話で、私は彼とその話題について論じました。彼は私に、スキオ（Sucio）がこの問題を取りあげて、温度計を使わずに山を測定する方法を明らかにした、と話してくれました。男爵がどんなに気をもみながら、この問題点についての話を聞いているのかが手にとるようにわかるのです。私は自分の考えが、20才の私の精神の中に生まれ、ヨーロッパでは滅んでしまったのであると思いました。私はただ、大高地やエクアドル近くにおいてであるということで評価されるスキオの理論を、再確認する考え方を示そうと努めていただけでした。私はこの博識な旅行家に、スキオの説明と彼の諸実験について切望しました。ところが彼がそれを原稿から引き出そうとした時に、彼は、スキオが沸騰した湯については何も考えていなかったこと、この物理学者は、戸外にさらされた温度計で一度低下するごとに670フィートを示す、というヘルデン（Herden）の方法のただ完成者にすぎなかったことに気付きました。そこで私は、再びささやかな発見にとりつかれるようになったのです。私の換算表をお送りしましょう。この表から、気圧と熱とが完全に対応していること、さらには沸騰法が正確であることがわかります。男爵がヨーロッパへ着く前に、こんな興味深い調査報告を公にできるとは、これを完成させるためには、海面まで伸ばしていくことが必要です。」（このスペイン語で書かれた部分は筑波大教授 西沢竜生氏に訳していただいた。）

高度と共に水の沸点が変化することに気づいた時に、すぐまたある地点（O）の気圧計の示度を決定するには、他の地点（U）での気圧計の示度と、UとOにおける水の沸点がわかればよい、という結論を引き出したカルダスの明敏さに敬意を表する。

3, 2 f. 対ヨハン・フリードリヒ・ベンツェンベルク（Johann Friedrich Benzenberg）（訳注：17

77～1846、幾何学者で物理学者)：パリ，1815年。

ベンツェンベルクは次のように記している：

私はある日フンボルトと、磁石の針によるさまざまな現象、これらの現象の毎日の変動、その期間について話し合った。ついに対話は、フンボルトが磁気嵐 (magnetische Gewitter) と名付けた磁石の針の注目すべきふるえについて、さらにスピノザ (Spinoza)、ライプニッツ (Leibniz)、レッシング (Lessing)、ヤコビ (Jakobi)、リヒテンベルク (Lichtenberg) (訳注：1742～1799、物理学者で作家) がどうして磁気作用の現象と呼んだか、また形而上学の内容を同じように心理学的に解明したか、に及んだ。——私はフンボルトに、ここで彼が深みに抗して引っぱり込まれることがないかどうかと尋ねた。——彼はあからさまに、また気取らずに答えた：「いいえ——自然はそのような印象を自分の心情に与えるかも知れないし——自分はこうした心情からのがれられないかもしれない——そしてこの心情は多分そうなることを妨げるでしょう。」——自己の何たるかを、正しく認識している者は、誰でも尊敬に値する。——いつか他の機会に、彼は次のように述べた：「海が自分に与える印象は非常に強く、またいつも新鮮であるから、もし磁石の針の動きによって地図を作り、様々な経度・緯度上に磁力の強さによって表を作る任務をまかせられたとしても、多年海にいて、陸地を見なくとも我慢できるでしょう。こうした試みや、日々に新しい海の景色は、決して退屈を感じさせないほど自分の心を引きつけるでしょう。」——彼に、どうしたら自然に対してそんなに新鮮で、若々しく、また純粹でいられるのかと尋ねると、彼は次のように答えた：「人間はその人格を、外国人の下で過ごす時に一番良く保持できます。異国はわれわれを受け入れず、それは遠い国のままです。——故郷との密接な関係は、遠い所ではわれわれに作用しません。——アメリカ旅行についてすべて出版し、次にアジアへ行き、そして帰って来たならば、私は人生の黄昏時を熱帯の国々で過ごすつもりです。南北両回帰線の間ほど、自然が強く人の心に訴えるところは他にありません——そこに2、3年いると、あたかも40年間もそこにいたような気がします。」——

人間、物体、関係についてフンボルトが判断する時に一層大きくなるフンボルトの無心さ——あどけなさ、内面の自由——と、その精神の非常な敏速さは、私がリヒテンベルク以来誰にも経験しなかったほど、人を魅了する。おそらくフンボルトと同じく相当高い程度に天才的ではあるが、しかしそれと同じ程度に人を引きつけるものはもっていない人々を見てきている。——人を引きつけるものは美しい心情がもたらすものであるらしく、美しい心情はあらゆる能力が一樣に、しかも調和がとれて発達していることから生まれるのである。

4, 9 f., 11, 19, 20. 対ハインリヒ・ヴィルヘルム・ドーフェ (Heinrich Wilhelm Dove)：ベルリン，1828年9月から。

ハインリヒ・ヴィルヘルム・ドーフェは次のように報告している：

フンボルト自身にとってもしばしば思いがけない出会いによって、生涯を通して続いた人間関係が

生まれている。「あなたはどのようにボンプラン (Bonpland) (訳注: 1773~1858, フランス人医師であり植物学者。フンボルトの友人で、アメリカ旅行の際の仲間である。) と知り合いになったのですか」と私は一度彼に尋ねた。「極めて単純にです」と彼は答えた。「外出するのでカギを預ける際に、管理人の夫人といつも二言三言親しく言葉をかわしますね。その時に、私は植物採集用の胴乱をもった若い人によく出会いました。この人がボンプランだったのです。われわれはこうして知り合いました」。

パリを去る者は、そこではすぐに忘れられてしまうが、フンボルトはちがっていた。パリで開かれた第1回産業博覧会で、一人のフランス人学者が私に次のように話してくれた。「あなたはイギリスの女王が来た際に、われわれが国王たちをどのように歓迎してきたかを知りました。フォン・フンボルト氏に、もう一度パリへ来てほしいと話して下さい。そうすれば、われわれが科学の王をどんなに誇りにしているか、世界中の人々が知るでしょう」。私がこの任務を果たすと、フンボルトは「それはできない。あなたに理由を話す必要はない」と答えた。

この人の長いパリ滞在の影響は、精神的には同じ人であったにもかかわらず、科学的な記述や、とくに対話の中のあらゆる言い回しに表われている。それは、まさしくフランス人の会話の特色なのである。「ノン (non) はフランスの言葉ではありません。フランス語はパルドン (pardon) です」とあるフランス人がカサノーヴァ (Casanova) に話した。フランス語の繊細さとは逆に、他人に何かを知らせる場合には、その人がそれを知っていることを前提としている。そこで、この種の呼びかけはみな“ヴ・サヴェ [あなたは知っています] (Vous savez)” から始まる。フンボルトが私に“ジー・ヴィッセン [あなたは知っています] (Sie wissen)” という言葉を使って何かを話し始めると、私はしばしば笑わずにはいられなかった。私は生涯の間、こういう言葉をほとんど聞くことはなかった。彼と知り合いになる機会があった者はみな、フランス人の会話の魅力を忘れないであろう。ザンクト・ペテルスブルク (訳注: リエニングラードの旧名) のフランス大使館員は、たった14日間の予定で突然パリへ帰ってしまった。なぜ? と彼に尋ねた。「語り合う (causer) ため」というのが答えであった。フンボルトは、ドイツ人の間でも語り合いが可能であるということを、私に気付かせてくれた唯一の人である。

しかし、話し合いにまつわるこうした魅力を保つには、話題に深く立ち入ることは許されない。きわめて真面目な話にも、機知に富んだ皮肉が混じっている。もし話題に立ち入るならば、好意的なほほえみを伴った「ああ、あなたは何て辛辣なの!」という言葉の中にきわめて高い価を期待してよいであろう。しかし、フンボルトだけがこういう口¹⁴⁾をきいたと考えるなら、それは全く誤った想像である。厳密な科学上の問題を明快な方法で記載する時にも、みなそうであった。これは、ほとんど発展をみななかった公生活時代の、当時のベルリン社会の口調であった。フンボルトがアルタイ山脈への旅行について「私が歩き回った地域は、ベルリンから万里の長城までのウサギのいる荒野である」と話した時に、シャミッソー (Chamisso) は植物学者であることをみせびらかして、私は干し草を採集したにすぎない……と、同じような方法でフンボルトの話を追認した。

よく原始林について取りあげられるが、マルティウス (Martius) (訳注: 1794~1868, 植物学者),

ペーピヒ (Pöppig), それに私だけが¹⁵⁾ 本当の処女林を見ました……, とフンボルトは一度私に話したことがある。

彼は、カシキアレ (Cassiquiare) 川とネグロ (Rio Negro) 川によって相互に結び付いているオリノコ川とアマゾン川の複雑な河川網を明らかにし、またアンデス山頂から太平洋へ下山する時に、彼にちなんで名付けられた、アメリカ西海岸を洗う深度 5,480 フィートの幅広い寒流を発見した¹⁶⁾。この寒流は、デュ・プチ・トゥール (Du Petit Thouars) が彼に指摘しているように、南から北へ莊厳に流れる極海の重要な部分である。水文学上広範囲にわたる研究の詳細は、彼自身によっては出版されなかった¹⁷⁾。私が彼に、これを出版しないのかどうかを尋ねると、彼は「私は草稿を利用してきました。草稿の代わりに言葉で印刷してきました¹⁸⁾」と否定的に答えた。

6, 331 f. 対フリードリヒ・ヴィルヘルム・ベッセル (Friedrich Wilhelm Bessel) (訳注: 1784～1846, ケーニヒスベルク大学天文学教授): ケーニヒスベルク, 1829年4月16日～18日。

フリードリヒ・ヴィルヘルム・ベッセルは、1829年6月4日にヴィルヘルム・オルベルス (Wilhelm Olbers) (訳注: 1758～1840, 医師であり天文学者) に宛てて次のように書いている:

フンボルトは、旅行の途中で二・三日私の家に泊まりました。彼の滞在は私を楽しませてくれました。私は彼の博識を知っているので、あらゆる科学分野の人々を集めました。それにもかかわらず、私は彼には本当に驚きました。彼はあらゆることについて、大多数の教授以上によく知っているようで、書物から学んだ人ではなく、自分自身で習得した人のようにみえました。3月20日に彼はペテルスブルクを出発しました。7月中旬にはカタリネンブルク (訳注: 1924年までエカチェリエンブルクと称した。現スベルドロフスク) へ、8月中旬にはキルギスステップへ行き、10月にペテルスブルクに戻ってくる予定です……。

14, 97. 対フリードリヒ・トラウゴット・キュツィング (Friedrich Traugott Kützing): ベルリン, 1834年11月。

キュツィングは次のように報告している:

アレキサンダー・フォン・フンボルトは私をきわめて誠実に歓迎してくれた。彼は私に、大西洋上に浮かんだ草地を形成している藻海 (北大西洋の西インド諸島とカナリア群島との間の一面に海藻類の浮遊する温暖な海域 [Sargasso: ホンダワラ]) についていろいろと話してくれた。とくにアドリア海と地中海の Sargassum 種に注意を喚起した。Sargassum natans は独立してその場に生じた種であるのかどうか、あるいは海岸によって引きちぎられた Sargassum vulgare の変種なのかどうか、今なお疑問とされているということである。次に、われわれはフランス人について話題にした。彼は私にトルパン (Turpin) (訳注: 1775～1840, フランス人画家) とボルズ・ドゥ・サン・ヴァンサン (Borze de St. Vincent) について話した。とりわけ後者は、非常な働き者であるという。『博物学辞

典 (Dictionaire d'histoire naturelle)』において彼が担当した項目の多くがぞんざいな扱いを受けたことに触れると、ボルズ (Borz) が、毎日印刷全紙を校正しなくてはならなかったほどあまりに多くを書いたためであり、彼には驚きではなかったことを口に出した。最後にモンターニュ (Montagne) とドゥケースン (Decaisne) が話題になると、彼は隣室へ行き、二人に関するいくつかの資料を取り出してきて、私に報告してくれた。

8, 44, 119 f. 対ハノーファー国王エルンスト・アウグスト (Ernst August): ベルリン, 1842年4月5日。

カール・エルンスト・フォン・マロルティ (Carl Ernst von Malortie) (訳注: 1804~1887, ハノーファーの式部官) は次のように報告している:

カールスバート (訳注: ボヘミア北西部にある東ヨーロッパ第一級の温泉地, チェコ語でカールロヴィヴァリ) から帰った後、国王は〔1837年〕9月17日にゲッティンゲンを訪ねた。ここでは大学の創立百年記念祭が催され、彼はこの祝典に出席した。彼はきわめて友好的に歓迎された。国王はこの時、一部の教師たちに取り囲まれたが、この中には陛下の訪問によって注目を集めたブルーメンバッハ (Blumenbach) (訳注: 1752~1840, ゲッティンゲン大学博物学教授) がいた。また国王は、きわめて有名な外国人、とくにゲオルギア・アウグスタ (Georgia Augusta) (訳注: 1811~1890, プロイセン王妃で後には初代ドイツ皇后となる。) が後見人になっている年配の人たちにも取り囲まれた。この中には、科学の君主であり、当時一般には国王と同等にみなされていたアレキサンダー・フォン・フンボルトがいた。両者はほぼ同じ年齢であり、精神力に満ち、同時代の人たちよりもまさっていた……。

国王は1842年4月5日にウンター・デン・リンデン通りの王宮で、プロイセン国王のために宴会を開いた。これには約40人が参列し、アレキサンダー・フォン・フンボルトも出席していた。エルンスト・アウグスト国王陛下は、ゲッティンゲンの教授達が上奏文の中で、愛国心について記していたと語った。国王はさらに皮肉を続けた: 「教授たちは祖国をもちません。教授や娼婦 (明瞭に表わすため彼は “娼婦 (des putains)” と付け加えた)・ダンサーはどこでもお金で雇えます。こういう人たちは、数ターラーよけいにもらえる所へ行きます」 (Briefe A. von Humboldt an Varnhagen von Ense. p. 118, 参照)。

フンボルトはこの意見に非常に憤慨し、饗宴後私に次のように話した: 「私を国王が同じような話をする宴会に招くなんてあまりにひどい。ヨーロッパの学者の間に私に一つの席を与えて下さるのは名誉のようですが、むしろ家に居た方がよかった」。

国王の意見を大きな、明らかに無遠慮な冗談であるとみた宴会の客たちは、この考えを特別に満足して受け入れたのであった。というのもフォン・フンボルト氏が、王室の永続的な随伴者として多くを受け取らなかったからである。——ついでにいうならば、フンボルトはとくにゲッティンゲンから7人の教授が追放されて以来、政治的な点においても国王の公然たる敵であった。教授に関する事件はみな、該当する官報によって直ちに広まり、フンボルトが国王についてどう考えているのかは、ファ

ルンハーゲン、フォン・エンゼ (Varnhagen von Ense) との往復書簡がくり返し証言している。彼は書簡の中で、国王にあらゆる誹謗を浴びせているのである。

9, 1, 222. 対エルンスト・クルティウス (Ernst Curtius) : ベルリン, 1843年12月上旬.

エルンスト・クルティウスは両親へ次のように書いている, 1843年12月10日 :

この前の水曜日の昼, 私はアレキサンダー・フォン・フンボルトの招待状を受け取りました [1843年12月4日]. 彼はつい先頃来宮内官と共にベルリンへ帰っていました. 彼は手紙で同時に, ギリシアの自然に関するいくつかの問題を提起してきました. 彼の所へ行った時, ギリシアの泉の所在地の自然状態について, 土壌に関してまで質問されました. さらに私に, 協議した問題についての短い論文を送ってほしいと申し出ました. 今, 彼は大著『コスモス (Kosmos)』を熱心に執筆中で, ちょうど地殻について研究しております. 千年以上も同じ岩の割れ目から流れている泉があることを実証するのが, 彼にとってはまさに重要なのです. この目的のために, 彼は私の知識を必要としたのでした. この課題は想像以上に難問でした. ところで彼は非常に好意的であり, 度々訪問するようにと誘ってくれました. 私は, 彼と休みなく話した一時間の間に, 彼から忘れがたいことを学びました.

9, 1, 258. 対エルンスト・クルティウス (Ernst Curtius) : ベルリン, 1844年11月.

エルンスト・クルティウスは両親へ次のように書いている, ベルリン, 1844年11月 :

今日, アレキサンダー・フォン・フンボルトが私を訪ねて来ました. 私はすごく自慢に思っています. 彼は私に活気に満ちた多くの問題を語ってくれました. 近く彼の『コスモス』が出版されますが, その中に私のこともでております¹⁹⁾.

9, 1, 272 f. 対エルンスト・クルティウス (Ernst Curtius) : ベルリンおよび小さな汽船上で, 1845年10月.

エルンスト・クルティウスはハインリヒ・クルーゼ (Heinrich Kruse) に宛てて次のように書いている, 1845年10月24日 :

フンボルトは非常に親切で, どこでも私の面倒を見てくれます. 廷臣が群がる中で, 彼は私に貴重な忠告の言葉を耳うちしてくれます. 私は, 人々がフォン・フンボルトを非常にすぐれて庶民的な教師であることに気付いていることを知って, 満足しないことはなかった. 先日われわれが小型汽船でパレッツ (Paretz) へ行った時に, 彼は船上であるアラビアの地理学者を取りあげて, マホメッド以前のアラビア語の言い回しの素朴さと優美さを, 長い間私に舌をもつれさせながら発音してみせました.

7, 278 ff. 対ルドルフ・レーマン (Rudolf Lehmann) : パリ, 1847年10月中旬~1848年1月7日.

ルドルフ・レーマンは次のように報告している：

フンボルトは、彼の研究を妨げていたベルリンの社交界と宮廷生活から逃れるため、よくパリへ逃げてきた。

芸術家や科学者の大パトロンであったフレデリック・ウィリアム (Frederic William) IV世国王は、彼の特別な友人であり、彼を侍従の一人にしていた。そのため彼の貴重な時間の多くが取りあげられた。これから逃れるために、彼はパリへ来るのだった。そして会員になっていた学会に近い家具付きの家 (maison meublée) で目立たないように宿泊するのであった。この学会の図書館で彼は研究を行った。こうした宿泊は、きわめて忠実な一人のスイス人によって守られていた。というのもフンボルトは、邪魔されずに研究したい時に、使用人が彼のために良心にそむいてうそをいって、面会を断わるのを嫌がると、不平をいうのが常であったからである。男爵が在宅かどうかを尋ねられると、この使用人は「彼はいますが、私に留守だといってほしがっています」と答えるのだった。フンボルトは多年パリの私のおじの家の常客であった。この家で彼は儀式ばらない食事をするのが常であり、彼に居心地よい時はいつでも、非常に親密であった。彼はしゃべるのが大好きで、このような時に話すのが最も好きであった。肖像画をほしがっていたおじの願いを聞き入れ、彼は快く私の鉛筆画のモデルになることに同意してくれた²⁰⁾。このため (運よく彼の家の近くである) 私の仕事場へ、6階であるにもかかわらず2回来てくれた。これは1847年のことであった。後にこの絵を私のコレクションに加えることができた、と報告できるのをうれしく思う。彼の興味深い談話について、何も書き留めていないのが残念である。月は地球へ何らかの影響を与えているように思える、といった私のふとした言葉を、彼が軽蔑し、あざ笑ったことだけを覚えている。「それはわれわれにどんな問題となるであろうか」と彼はいうのであった。「月が右から上るか、左から上るか、いや全然上らないか？ そんなことは子供部屋の話題だ」。

10, 273 f. 対フリードリヒ・ダニエル・バッサーマン (Friedrich Daniel Bassermann) (訳注：1811～1855, 政治家)：ポツダム宮殿，1848年11月14日。

バッサーマンは次のように報告している：

国王〔プロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルムIV世〕はサンスーシー宮殿にとどまったが、プロイセンの王子はバーデスベルク (Badesberg) の城ではもはや安全ではないので、今では軍隊によって厳重に守られたポツダムの宮殿に一緒に住んでいた。人々は、最初のフランス革命が起きたヴェルサイユ宮殿を思い出すのを嫌がった。

饗宴が始まる前に、われわれは控えの間に集まった。私があ時代に好気心の的であり、視線の標的であったのは当然である。一人のかなり若く、美しい顔立ちの太った宮内女官のために、私はこれを喜んで我慢するのであった。それでも私にとって最も興味深い知人は、80歳のアレキサンダー・フォン・フンボルトであった。

彼は私に自己紹介し、そしてよくしゃべった。こういう激動の時に、『コスモス』の執筆が続けられるのかどうかという私の間に対して、彼は、すでに経験した一連の革命には、目新しさも刺激的なものも失ってしまったと答えた。彼はこの時代でさえも、2冊の著書（“コスモス (Kosmos)” の第2巻²¹⁾と“自然の相貌 (Ansichten der Natur)” の改訂²²⁾）を同時に取りあげていた。まもなく王妃と一緒に入って来た国王は、かなり無口であった。王妃は、かつては美しかったにちがいないと思われた……レナルト伯爵 (Graf Renard)、フンボルト、それに私を除く男の客たちは、軍服を着た人たちであり、一部は侍従、一部は将校であった。勲章をつけていないのは私一人であった。国王夫妻の右側にはプロイセンの皇太子が、左側にはその奥方が座った。彼らに向かい合ってわれわれ外国からの客であるレナルド (Renard)、シェーファー (Schäffer)、それに私と、フンボルトも座った。国王はフンボルトを辞書のように常に手元に置くのであった……。

11, 59 f. 対ダニエル・フロレンキオ・オレリア Daniel Florencio O'Leary : ベルリン 1853年。
 コルネリオ・イスパノ Cornelio Hispano (すなわちイスマエル・ロペス Ismael López) は次のように書いている：

ボリヴァー Bolivar (訳注：1783～1830、スペイン支配からの南米解放運動者) の死から23年たった1853年に、友人であり、以前解放者の副官であったロレリア (O'Leary) 将軍が、クラレンドン Clarendon 卿の命令によって、ダリエン Darién 湾から地狭を通り貫ける両大洋間の運河の開通についてベルリンでフンボルトと協議した。フンボルトは相手とこの問題を取りあげた後、スペイン領アメリカとボリヴァーについて次のように話した：

1804年の終わりにアメリカから帰った後、私は彼とよく行き来しました、とフンボルトは話した。彼の生き生きした歓談、民族の自由への愛、輝くような想像力は、私に彼を夢想家のように思わせました。私は、彼がアメリカ十字軍の有名な指揮官になるとは決して思いませんでした。スペイン植民地に私が滞在している間に、一度も不満を感じたことはありませんでした。後に戦争が始まった時になって初めて、私には真相を伝えなかったこと、愛慕ではなく深い憎悪が存在することを知りました。この憎悪が、報復処置や復讐行為のうずとなって爆発したのです。しかし、私が最も驚いたのは、ボリヴァーの輝かしい人生行路でした。私がイタリアをもう一度旅行するためにパリを離れたのは、われわれが別れて間もなくのことです。この偉大な男の活動、才能、名声は、われわれ二人がスペイン領アメリカの解放に対する燃えるような願いを話していた時の、彼の熱狂的な爆発を思い出させます。私はアメリカ社会のあらゆる階級と深く知りあったので、どこかに革命の責任を負うことのできる人が現われるならば、ニューグラナダで革命が起きるにちがいないという考えをもっていました。ニューグラナダでは18世紀末にある前兆が認められ、その傾向は私も知っています。私の連れボンプランは、私よりも洞察力が鋭く、始めから彼はボリヴァーを好意的に受けとめ、私の面前でさえ彼を奮起させていました。ボリヴァーがベネズエラの独立に関する計画を知らせてきたので、彼がそれを実行しても決して驚かないということを、ある朝ボンプランが私に書いてきたことを覚えています。

彼ボンプランは、若い友人についてすべてにきわめて好意的な意見をもっていました。当時、ボンプランもまるで訳の分らないことを言っているように私には思えました。思い違いをしたのは彼ではなく、私でした。なぜなら、私はもっと後になって、ようやくあの偉大な男について思い違いをしていたことが分ったからです。私は彼の偉業に感嘆しています。彼の友情は私にとって名誉なことであり、また彼の名声は全世界のものです。

（訳者注：原文はスペイン語であるが、ドイツ語訳が併記されている）

〔ドイツ語訳はハンスカール・シュナイダー Hans-Karl Schneider, ハンブルクによる〕

12, 120-124. 対ヴィルヘルム・フェルスター Wilhelm Foerster：ベルリン 1855年。ヴィルヘルム・フェルスターは次のように報告している：

当地の天文学者の斡旋によって、フンボルトは私を含む天文台の助手たちを招待する日取りを決めた。われわれは彼の家（オラニエンブルガー通り）の応接室へ通された。ここでわれわれは、ある種の厳粛さと同時に、この偉大な人の目には見えない親しみを、彼の住み慣れた環境の中で楽しんだ。この部屋はまったくあっさりしているが、見事な部屋で、たいていは歴史風俗画であるいくつかの油絵によって美しく飾られていた。ソファのそばにはテーゲル Tegel の父方の家の小さな魅力的なスケッチが掛っていた。反対の隅には、尊敬する友アラゴ Arago（訳注：1786～1853, フランス人物理学者）の大きな胸像が立ち、二重窓の所にある二・三の緑色の植物が飾りになっていた。かすかな音と共に急に戸が開き、フンボルトがわれわれの方へすばやい歩調で近づいてきた。彼は力強く握手をし、非常に誠実に、包み隠しなく二・三の歓迎の言葉を述べて、椅子をすすめた。かなり多くの椅子が本によってふさがっていたので、彼は急いで他の部屋へ走り、驚くべき敏捷さで一つの椅子を運んできた。私は彼にアルゲランダー Argelander（訳注：1799～1875, 天体物理学者）の弟子として紹介された。彼は「私の尊敬する友人の」とそれに付け加えて、すぐに私に、ボンから直接来たのかどうかを尋ねた。私がこれについて説明しようとした時、彼には私があまりに小声で話しているようにみえたらしい。そこで、彼は急いで椅子を動かして暖炉のそばに置き、私の腕を取って私をソファへ引き寄せて、「大きい声で話して下さい。私は耳が遠くなりかけています。まずつんぽになり、それどころか次には愚鈍になります」と話した。しかしこの時彼が非常に陽気で、その上ふざけたような目つきをしたので、私は真に情愛ある言行を彼に対して感じた。私は危く彼の手に接吻するところであった。彼は、私が一冊の本（私の学位論文）を手に行っているのに気付いた。それと分る態度で、即座にそれを彼に渡させた。彼は題目を見て、題目から熟達した才によってすばやく、ボンの緯度についての問題を取り扱っていることを察した。私の測定が到達した精度の問題について数字をあげると、その数字に対して彼はからかうように疑って答え、あたかも彼は、君たち天文学者は、自分が請け負える以上に自己と自分の器具を信じ過るといったげであった。これに対する私の笑いがらの答えは、彼の暗示を理解したものとして彼には気に入られたようであった。続いて、ボンから離れてどのくらいいたつか、と彼に聞かれ、私は故郷グリーンベルク Grünberg と現在の業務をあげ

た。彼は、砲術には数学者にとってもなお解決すべき多くのことが残されている、と述べた。最近やっと、若い将校が包弾の回転と射程距離との関係について分析的なすぐれた論文を書いた。「すばらしい」と私は答えた。「われわれ新兵は、まことに基本的な点で助けられます」。彼は心から笑って、私がシュトゥルフェ Struve 付近のプルコワ Pulkowa にいなかったかどうかを尋ねた。彼はアルゲランダーの手紙から、そこについてのかすかな輪郭を思い出した。私は否定したが、未知の名もない若い男に関連させて、きっとアルゲランダーが話したにちがいない計画を思い出した記憶力に、私は非常に驚いた。少し休憩した後、私の友人ブルーンズ Bruhns が、フンボルトがパリで書いた屈折に関する論文について尋ねた。この質問は、屈折に関する彼のすべての研究、さらには同時代の他の人々による研究について彼に話させる機会となった。この瞬間からほとんど休みなく、彼はほぼ 3/4 時間にわたって、豊かな思想と豊かな言葉を用いて話した。こうした彼の思想と言葉の豊かさは、私を信心深く敬虔にさせた。私はこの間に、彼をもっと詳しく観察し、彼という人柄の像を焼き付ける時間を得た。この像は、心の中で私の道を照らし続けた。彼の身長は高くはなく、前かがみというよりはむしろずんぐりしているといえる。彼の顔には、あまり重要な特色ではないが、高齢であることが印されている。しかし頭はまことに堂々たるだ円形をし、高くもりあがった端正な額は、衰えを感じさせない精神力を刻印していた。そして彼が流暢に、豊かな音の響きを伴って話す時、彼の顔の表情は、口からほとばしる優美で高度な思想を写し出す鏡のようであり、あらゆる様相を映し出して輝くのである。彼が、彼の過去がもつ深さと広さにひたる時、その顔つきには、われわれが感ずることができるほどの王者の如き幸福の光が輝くのであり、彼は、多くのもっと若い科学者が永遠の羨望の的としている人類の輝かしい頂点に立っているのである。屈折の問題に関して、彼はそのよく知られた文献に関する博識から、これについての解説がなされている多くの箇所を挙げ、さらに彼がビオ Biot（訳注：1774～1862、パリ大学天文学・物理学教授）と共同で行なった地上の光線屈折、とくに蜃気楼の研究を取りあげて、その際に「ビオは、私同様非常に高齢である」と述べた。

それから彼は、この問題についてのモンジュ Monge による研究を非常に露骨な言葉で批判した。『コスモス』における彼の批判は、控え目で穏やかなものであったので、これは私にとってたいへん重要に思われた。それは性格的な特徴でも、意識的な節度でもないことが分った。『コスモス』はこれによって、一つのさらにまとまった不朽の著書として、また選りすぐられ、評価の下された著書としての特色をもち、全体の構想に関しても完璧である。フンボルトは引き続き、ヴォラストン Wollaston（訳注：1766～1828、天体物理学の創立者）の見事な実験を取りあげた。ヴォラストンはこの実験で、火鉢の上で蜃気楼を生み出すことを知ったのであった。

今や彼は徐々に質問の対象を離れて、どうして観念は記憶を呼び起すことによって生まれるのかについて取りあげ、議論し始めた。この議論は、彼の話す言葉の優美さや、生き生きした直観のおかげだけでなく、私があえて全実在の主について説明し、十分活躍したおかげで、非常に楽しいものとなった。この話し方の特色を記載するのは難しい。本来、これは一つの明瞭な思考なのである。思い出はわずかな記憶をたどることによって生まれるが、過去をさぐっていた想像力が一群のはつらつとした形像を導き出す時には、それが観念へまで成長するのが分かる。新しい一つの記憶を呼び起すこと

は他の領域へも伝わり、同じように再び形像化が完了し、多様な形像と観念とは幸運にも結び付き、われわれの下をすべりさって行くのである。それはあたかも、河川が変化の多い沿岸地域に沿って、われわれを静かに下流へ運んで行くような気分である。しかし、われわれは強力で壮麗な流れにすることも感じている。その力は沿岸の岩が物語ってくれているが、河川は穏やかに静かに流れ、非常に静かな動きで湾内に小さな円を描く。

フンボルトの話し方は、すべてを研究と観察の環へ引き入れる不断の知的活動について、きわめて小さな現象を測定し、一般化させることに熟達したすぐれた観察力について、そして最後に、彼が感覚的に描くことができる美的な鑑識力と優美さについて、一つの解明がなされているように思えた。彼は、広い土地をきわめて規則的に花崗岩の切り石がおおい、島状の豊かな植生によって生命を与えられているような地質上注目すべき場所について言及し、こうした場所と未開の自然のままの地域のまったく中の公園施設とを比較したが、彼があまりに楽しそうな様子であったので、すでに私が少年時代に、熱帯世界への彼の熱烈な嘆美によって呼び起こされたあらゆるあこがれを思い出した。彼の話し振りの事例として、すでに述べた屈折の問題の出だしの部分に関連した談話の短い断片を、できるだけ詳細に描写してみたい。

「そうです、蜃気楼の現象は珍しい自然現象ですが、信じられないほどよく起きています。私はアラゴ Arago と一緒に午後の暑い時刻にパリのリュクサンブール公園を散歩するのを常としていましたが、その時、ブドウの茂った建物の壁が、太陽の絶え間ない作用の下で、強烈な熱の流動を生み出しているにちがいないと思いつきました。たしかにそうで、すぐにわれわれは蜃気楼にも気付きました。壁に沿って見ると、友人の腕が空中にあるように見えました。宮殿の階段に沿っても、広場の熱い砂の上でも蜃気楼が起きていました。こうした砂は、太陽の長時間にわたる作用で、時々ものすごく高温になってます。われわれは、私が間違っていなければ、列氏（氷点から沸点までを80度に分けた寒暖計の単位）54°を測定したことがありました。アメリカ旅行中も、われわれは灼熱の砂からとくに足を守らなくてはなりませんでした。私の仲間であったボンプランは、一度そのために足にヤケドをしたのだと思います。ご存知のように、足は熱に耐えられる身体の一部ではありません。これは舌です。それも舌へ提供される最高に熱いものは、アップルソースや熱いコーヒーなのです。アラゴと私はこれについて試してみましたけど、約50°の熱さのコーヒーを舌の上でかなり我慢することができました」……など。

この断片から、彼の思考が休むことなく働き、どんな小さな現象の細部までもとらえ、どんなに好意的に聞き手に興味をもたせたかがわかる。本当に彼が話しているのを見ると、彼が高齢であることが訝しくなる。彼のこうした活発さや活動性は（もし彼が並の人であったなら）ますます少なくなってきた精根をずっと前に使い果たしてしまったであろうに。彼ははつらつとし、朗らかであり、さらにせっせと『コスモス』に手を加えている。健康について尋ねると、彼は次のようにかわした：「私は今でも、相変らずシャルロッテンブルク Charlottenburg とベルリンとの間の道路上で生きています」。この時の彼の顔の表情は複雑であった。一部は宮廷で彼に示される深い友情についてのうれしさであり、一部は彼の暇が妨げられることの煩わしさであった。しかし意地の悪い世間では、巨匠フ

ンボルトはすごい現世主義者であり、どんな祝宴の際にも王のように楽しく過ごすといわれている。

彼の談話の最大の部分は、発見旅行の本質、結果、将来に関してであった。私はアフリカの旅行家バルト Barth（訳注：1821～1865、アフリカ研究者）博士の死に言及し、この話題を彼に譲ることにした。

「気候は、とりわけ下流や河谷でものすごいのです。なにしろオリノコ地方の河谷でかかった病気のため、私の右腕は今でも弱いだから。でも不運な旅行者たちにとって、アフリカのどこに河谷以外の交通路があるだろうか。人生の浪費であって、成果は得られません。民族学や商業上の関心のためなら旅行は非常に有益ですが、自然科学にとってはちがう。そこでは何も採集できません。人々はいつも脅かされ、強奪され、このような移動の際には、その場での観察はたいして意味をもちません。私が持ち帰った採集物から、植物学者や地質学者による南米についての多くの解明が可能になりました。その結果、レオポルド・フォン・ブーフ Leopold von Buch（訳注：1774～1853、地質学者でフンボルトの友人）は、実際に行ったことはありませんが、チンブラッソー山の形成について、私と同じくらい詳しくなりました。アフリカへ行った人たちはいつも、また永久に彼らのチャド湖について書き、しかもぐるぐる堂々めぐりしている。侍医シェーンライン Schönlein（訳注：1793～1864、フリードリヒ・ヴィルヘルムIV世の侍医）の息子であり、もしかしたらあなたが知っている若い男もエジプトを通り、アフリカ内部へ出発しました。私は断固として彼に思いとどまらせ、むしろ中央アメリカの注目すべき火山地域の一つに長く滞在し、そこで採集や、かなり長期の観察旅行を行なうようにすすめました。そこで一定の休息と安全性を確保することによって、本格的な、成果のある研究に没頭することができるのです」……。

こういう感じで、フンボルトはかなり長い間話した。私は、私の見解が確認できて本当にうれしかった。これによって、どんな点でも拡大することより深めることを優先させることができる。フンボルトは両者（拡大と深めること）の巨匠であり、科学を拡大することによって、科学が目下構築するかもしれない枠組を描いてきた。アフリカ旅行について話している時に急に名前を忘れると、彼は記憶の穴をすぐに埋めるために素早く立って行った。この習慣は、すぐれた記憶力を維持するために重要な秘訣である。今や多くの本がめくられ、彼は急に名前を思い出した。その後、彼はわれわれに多くの地図や、アフリカ旅行家を送ってきた特殊な記録を見せてくれた。そして最後に、近いうちにもう一度来てほしいといって、われわれを見送った。

彼の豊かな談話を満喫し、彼の高い人間性に感銘し、また親しみ深い彼の人柄をうれしく思いながら私は科学の巨匠のもとを離れたが、今でもよく心の中で思い出があらたになり、彼の姿が浮かぶのである。

13, 252 ff. 対ルドルフ・ハイム Rudolf Haym（訳注：1821～1901、歴史家。1856年にはヴィルヘルム・フォン・フンボルトの伝記を出している。）：ベルリン、盛夏 1856年。ルドルフ・ハイムは次のように報告している：

オラニエンブルガー通りの家に私が初めて立ち寄った際、まず奉公人〔ヨハン・ザイファー Johann Seifer〕から、彼の閣下〔アレキサンダー・フォン・フンボルト〕をそう簡単には訪問できないだけでなく、あらかじめ文書で請願した謁見だけを引き受けると知らされた。こうした謁見が私に許されたことを、丁重という以上に親初で特別な手紙によって知った。同時に、この尊敬すべき人は、私が送った本²³⁾のお礼をいってきた。胸をおどらせながら、私は実際二日後に謁見のために到着した。階段で私を検閲する軍人に出会い、その後すぐに私は著名な人の前に立った。学者である以上に宮内官であり、現代よりも過去の時代に合った服装をし、威厳以上に端正な人の前に立ったのであった——高いエリ飾りの上の大きな頭は、いく分横に傾いている——87歳の白髪の老人であった。指摘された時間を厳守しなかったことを非難しながら私を迎えたので、私の勇気は高まらなかった。たった今、フォン・ヘーデマン von Hedemann 将軍は彼の家から立ち去った²⁴⁾。私がここで将軍と一緒に会うことをフンボルトに不可能にさせてしまったと彼は悔やんだ。われわれは再び座った。私は、私一人を接待してくれたことに対するあらゆる尊敬と感謝の念を、もしかしたらあまりにくだい言い回しで述べた。彼は私と話をしたが、あまり友好的ではなかった。彼は「前おきはやめて！」と命令した。それゆえ私に残されたことは、彼が彼の兄の生涯に関する記録をもっていないかどうか尋ねることだけであった。彼はこれをすげなく、またきっぱりと断わったが、しかしすぐに、私の叙述では、個々の人物があまりに理想的な姿で描かれていることをほのめかした。たとえば、ヘンリエッテ・ヘルツ Henriette Herz (訳注：1764～1847, 医師マルクス・ヘルツの夫人) がそうである。彼女に関する彼の報告は、確かに正当であった——それは純粋な逸話であり、うわさ話であり、あまりにおもしろい回想のスタイルを採っていたので、彼はきわめて辛辣なことをフランス語でいった。これに対して私はほとんど答えられなかった。私も、請願者として彼の所へ来たものではなかった。それで、私に対して好意的な彼の善意が生まれていることを彼がきれぎれにほのめかした時、私は驚いた。彼はシュラギントヴァイト Schlagintweit 兄弟 (訳注：ヘルマン、アドルフ、ロベルトの三兄弟で、いずれも1850年代中頃にインド・ヒマラヤを調査している) の名をあげた。彼は兄弟を助けて、インド旅行を達成させた。2番目の男、シュレスヴィッヒ＝ホルシュタイン人の名前をあげようとした。しかし、その名前は彼の口から出てこなかった。彼の考えていることを助けられないのは、私にとっても、彼にとっても苦痛であった。彼は不気嫌さを隠さず、腹だたしく足で床を強く踏んだ。私は、最後の挨拶および感謝の言葉と共に、舞台に結末をつけられたことをうれしく思った。それから私は、まことに消然と立ち去った。私はとても失望した。アレキサンダー・フォン・フンボルトはファルンハーゲンとの往復書簡によって知られているが、私が会った彼は偉大な学者ではなく、一人の老人であった。

5, 52-53. 対ヴィルヘルム・フェルスター Wilhelm Foerster : ベルリン 1858年と1859年。ヴィルヘルム・フェルスターは次のように報告している：

私は1858年春にベルリン大学哲学部で、天文学の私講師としての資格が認められた。当時、エンケ Encke (訳注：1791～1865, ベルリン大学天文学教授) 教授がなお天文学の主要な講義をしていたの

で、私は1858年夏学期に、まず天文学史についての講義から始めた。この講義は、今まで大学ではほとんど支持されていなかった。

かつて私をボンへ導いたのも、次にベルリン天文台で観察と計算をしていた最中に、まさに天文学の発達に貢献する広大な文化史の研究に私を没頭させたのも、フンボルトの『コスモス』であった。私はギムナジウムの頃からギリシア文学がとくに好きだったので、まずギリシアの天文学者について、ギリシア天文学と一方では原始民族の星学との関係について、他方ではアラビアおよびキリスト教中世の星学との関係についてが、私の最も楽しい研究となった。

そしてこの時に、歴史学と天文学におけるこの分野の研究で、私は特別な幸運に恵まれた。ギリシア精神史の偉大な専門家であるアウグスト・ベックは、高齢になってから非常に集中的にギリシア天文学の研究、さらにピタゴラスとプラトンの哲学とギリシア天文学との関係についての研究を始めた。このベルリン大学哲学部の尊敬すべき老練家は、その後ある日私の師エンケ教授に、もっと若い天文学者に彼の研究の計算を手伝ってもらいたいと話した。私の研究にとって、こうした研究共同体以上に良い環境は見い出せなかった。私はきわめて重要な老紳士のために、器用に技術上の援助を提供することができた。私が提供するこうした友好的な援助に対して、彼は感動的な感謝の念から、私の歴史の研究に計り知れないほど独特で、また深い洞察を与えてくれた。

次に1858年と1859年にも、このまことに理想的な研究状態と同じような関係が生まれた。エンケが私をアレキサンダー・フォン・フンボルトの下に推薦してくれた。90歳になるこの偉大な人は『コスモス』の編集を続けていたが、時々天文学の分野の文献についてわずかな協力を必要とした。私は、これらの文献を彼に天文台から届けることができた。ベックと同様に、老紳士は若い手伝いに対して筆舌に尽くし難いほど親切であった。長時間彼の下で働いた時には、特別な方法で私をねぎらってくれた。こういう時には「ちょっと話しましょう」といいながら、何の苦勞もないこの永遠に豊かな追憶の世界が、どんなに連想におぼれているかがはっきりと感じとれるほどに、彼は天と地とを包括する豊かな精神生活から、思い出と経験とをつなぎ合わせるのであった。私は一度も、身体上すでに年をとり弱くなっているが、語ることににおいてはほとんど休みなく活動する白髪の彼の下でのように、この追憶の世界が、この上なく幸福な自治権を得ているという印象をもったことはなかった。そこではフランス革命期とナポレオン時代の映像が、つい最近の事件や、希望に満ちた国際的な科学機構の設立への展望と同時にあらわれ、次には再び南アメリカの巨大な山地の世界や中央アジアのステップからの描写がなされ、そして最後にもしかするともう一度、はるか彼方への思索に賛美が行われるのであった。当時ちょうど、このはるか彼方への思索が気力の維持という教義のボールを取り始めていた……。

注

1) *Gespräche Alexander von Humboldts*. Hrsg im Auftrag der Alexander von Humboldt-Kommission der Deutschen Akademie der Wissenschaften

zu Berlin von Hanno Beck. Berlin 1959.

ベルリンのドイツ学士院、アレキサンダー・フォン・フンボルト委員会の依頼で、ハノ・ベックによ

って『アレキサンダー・フォン・フンボルトの談話』が1959年に出版された。

2) フンボルトはこれに関して次のように述べた：

「プロイセン王国はまるで悪夢である。この国は多数の断片から形成されているので、プロイセンという国民性はまったく虚構である」：James Pope-Hennessy: *Monehton Milnes* [Lord Houghton]. Bd. 1 London 1949 S. 213: フンボルトについてのメモの中での Adolphe Quetelet の意見も、このような対話の印象とは対照をなす (*Annuaire Ac. Royale Sc. de Belge*, Bruxelles 26 [1860] S. 102, Anm. 1): 「時として彼の会話は続き、辛らつな皮肉の刻印には非常に驚かされた。これらは、ほとんど経験したことのない人々を不安にした」。

3) 発表された書評は、筆者のフンボルトコレクションの中にほぼ完全に記録されている。

4) これについては、Lotte Kellnet 博士、ロンドン、Kurt-R. Biermann 博士、ベルリン、Johannes Eichhorn 博士、Kleinmachnow、Fritz G. Lange 氏、ベルリン、Ulrich-Dieter Oppitz 氏、エッシュヴェーゲ、Adalbert Plott 博士、ライプチヒ、Fritz Schirme 氏、ハレ、Hans-Karl Schneider 博士、ハンブルク、に心から感謝したい。——ザグセン Johann 国王と、プロイセン Friedrich Wilhelm IV 世および Wilhelm I 世との往復書簡における対話は採用されなかった (Leipzig 1911 S. 27 f.); “*The Life, Travels and Books of Alexander von Humboldt*” (by Richard Henry Stoddard). With an Introduction by Bayard Taylor. New York 1859 の著書から; Wilhelm Erman の著書において (*Paul Erman, ein Berliner Gelehrtenleben 1764-1851*. Berlin 1927 S. 182 ff.); Rudolph v. Delbrück の 1817年から1867年までの回想録において (Leipzig 1905, Bd. 1 S. 27, 86, Bd. II S. 3); J. T. C. Ratzeburg による *Forstwiss. Schriftsteller-Lexikon* から (Berlin 1874 S. 262 f.); Eilhard Mitscherlich 著作集から (Berlin 1896 S. 62 f., 76-79, 83 f.); C. G. J. Jacoli と M. H. Jacoli 往復書簡集から (Leipzig 1907 S. 117 f. S. 132 f., S. 75); Heinrich Weber の著書から (*Wilhelm Weber. Eine Lebensskizze*. Breslau 1893 S. 11 ff.); “Aus meinem Leben”——Aufzeichnungen des Prinzen Kraft zu Hohenlohe-Ingelfingen (2. Bd. 7. Aufl. Berlin 1906 S. 21 ff.)。

5) 1843年 クリスマスの翌日; Literaturverzeichnis

Nr. 9, Bd. I S. 348 f. 参照。

6) Hanno Beck: *Gespräche*, 前掲1) S. 238 ff., 243-249.

7) Hanno Beck: *Alexander von Humboldt* 2 Bde. Wiesbaden 1959, 1961, ここでは Bd. II S. 202~205.

8) Karl Gutschow: *Berliner Erinnerung und Erlebnisse*. Hrsg. v. Paul Friedländer. Berlin 1960 S. 351 ff.

9) Charles-Augustin Sainte-Beuve は、「フンボルトは非常に長いいくつかの文章で表現したが、その際、いつも彼は一つの文章の終わる時にはなく、まん中でだけ一息つくほど整っていた」と主張した; R. Bouvier u. E. Maynial: *Der Botaniker von Malmaison. Aimé Bonpland, ein Freund Alexander von Humboldts*. Neuwied 1949 S. 9.

10) Karl von Holtei: *Die Eselsfresser*. Bd. II Breslau 1860 S. 220-223.

11) Adolf Bernhard Marx: *Erinnerung aus meinem Leben*. Bd. II Berlin 1865 S. 122 ff.

12) *Life and Letters of Sir Charles Hallé*. Edited by His Son, C. E. Hallé and His Daughter, Marie-Hallé. London 1896 S. 99 f.

13) *Charles Babbage's Passages from the Life of a Philosopher*. London 1864 S. 198-202.

14) Dove はここで、上記の Karl von Holtei の記載もあげている。

15) “*Ansichten der Natur, mit wissenschaftlichen Erläuterungen*” (3. Aufl., 1. Bd. Stuttgart/Tübingen 1849 S. 323) において、フンボルトは次のように記している：「熱帯林がすべて原始林なのではない。私の旅行記の中では、後者の言葉はほとんど使用されていないが、現在生存している自然研究者の中で、私とボンプラン、マルティウス、ペーピッヒ、ロベルト Robert とリヒアルト・シヨンブルク Richard Schomburgk が最も長く大陸の内部の原始林の中で生活したと信じている」。

16) フンボルトはこの海流の水溫測定を最初に行なったことだけを自分の業績として必要とした。

17) それでもフンボルトは、彼の “*Relation Historique*” (3 Bde. Paris 1814, 1819, 1825) の中で、たいへん多くの水文学上の研究を報告している。

18) Heinrich Berghaus: *Allgemeine Länder-und Völkerkunde*. Bd. 1 Stuttgart 1837 S. 575-583.

19) Eduard Bushmann の “Register über den

- Kosmos" (*Kosmos*, Bd. V Stuttgart 1862 S. 349) では、もっと多くの言及がなされている。
- 20) 1848年1月7日にフンボルトはこのスケッチに署名した。
- 21) フンボルトは当時 "*Kosmos. Entwurf einer physischen Weltbeschreibung*" の第3巻 (Stuttgart / Tübingen 1850) に従事していたにちがいない。というのは、2巻はすでに1847年に出版されたからである。
- 22) フンボルトは当時 "*Ansichten der Natur, mit wissenschaftlichen Erläuterungen*" の「3回目の改訂・増補版」(Stuttgart / Tübingen 1849) に従事していた。
- 23) Rudolf Haym: *Wilhelm von Humboldt. Lebensbild und Charakteristik*. Berlin 1856.
- 24) アウグスト・フォン・ヘーデマン August von Hedemann 将軍 (1785-1859) は、アーデルハイト・フォン・フンボルト Adelheit von Humboldt (1800-1856) と結婚し、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの義理の息子であった。ヘーデマンはハイムを援助することが必ずできたと思われるので、アレキサンダー・フォン・フンボルトがハイムのために、彼の遅刻を残念がるのも当然であった; Hanno Beck: 前掲7), Bd II S. 325.
- 25) たとえば、低(地)ドイツ語の詩人クラウス・グロト Klaus Groth をあげることができたであろう。

文 献

- 1 MARTIUS, ERNST WILHELM: *Erinnerungen aus meinem neunzigjährigen Leben*. Leipzig 1847, Neudruck Berlin 1932 mit abweichender Paginierung!
- 2 SCHUMAGHER, HERMANN ALBERT: *Südamerikanische Studien. Drei Lebens- und Kulturbilder. Mútis. Cálidas. Codazzi. 1760-1860*. Berlin 1884.
- 3 BENZENBERG, JOHANN FRIEDRICH: Aus Paris. In: *Rheinischer Merkur* Nr. 325 v. 6.11.1815.
- 4) DOVE, HEINRICH WILHELM: Gedächtnissrede auf Alexander von Humboldt. Gehalten in der öffentlichen Sitzung der Königl. Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin am 1. Juli, dem Leibniztage des Jahres 1869. Berlin 1869.
- 5 FOERSTER, WILHELM: *Lebenserinnerungen und Lebenshoffnungen*. 1832 bis 1910. Berlin 1852.
- 6 *Briefwechsel zwischen W. Olbers und F. W. Bessel*. Hrsg. v. Adolph Erman. Bd. 2 Berlin 1911.
- 7 LEHMANN, RUDOLF: *An Artist's Reminiscences*. London 1894.
- 8 MALORTIE, CARL ERNST VON: *König Ernst. August*. Hannover 1861.
- 9 Erns Curtius *Ein Lebensbild in Briefen*. Neue Ausgabe von Friedrich Curtius. Bd. 1, Berlin 1913; Bd. 2, 2. Auflage, Berlin 1913.
- 10 BASSERMANN, FRIEDRICH DANIEL: *Denkwürdigkeiten*. Frankfurt a. M. 1926.
- 11 HISPANO, CORNELIO (Ismael López): *El libro de oro de Bolívar*. Paris 1925.
- 12 FOERSTER, WILHELM: Ein Besuch bei Humboldt. In: *Der Sternfreund* 1. 1936, S. 120-124.
- 13 HAYM, RUDOLF: *Aus meinem Leben. Erinnerungen*, Aus dem Nachlaß hrsg, Berlin 1902.
- 14 *Friedrich Traugott Kúzing. 1807-1893. Aufzeichnungen und Erinnerungen*. Hrsg. v. R. H. Walther Müller u. Rudolph Zaunick. Leipzig 1960.

Hanno Beck : “Zur Geschichte der Alexander-von-Humboldt-
Forschung” and “Hinweise auf Gespräche
Alexander von Humboldts”

Hiroshi SASAKI and Momoyo TAMURA

These are the translation of two articles by Hanno Beck in the book, “Alexander von Humboldt Werk und Weltgeltung”, Herausgegeben von Heinrich Pfeiffer für die Alexander von Humboldt-Stiftung, R. Piper & Co Verlag, München, which is published in 1969, in the year of the 200th anniversary of his birth.

Hanno Beck is most famous for a German researcher about Alexander von Humboldt and the history of natural sciences. Hanno Beck studied History, German and wrote a doctor's thesis in 1951 at the University of Marburg, and habilitated for the history of natural sciences in 1963, and since then give a lecture on this subject at the University of Bonn.

The research on A. v. Humboldt began already in this life. But he forbade the publication of his letters by his last will, which stopped the research about him. In due course his letters have been published just like a flood in Germany, France, Great Britain, U.S.A. and Latin American countries. Hanno Beck gathered the letters of A. v. Humboldt and his many relatives with great effort.

Research on A. v. Humboldt in Japan is very few and only carried out by S. Noma, O. Nishikawa, K. Iwata, R. Yasugi, I. Maejima and M. Ohmori.